二次元ドリームノベルズ
18
未満
サンダークラップス！
リボーン
THUNDER CLAPS! REBORN
テスタメント
羽沢向一
挿絵：緑木邑

Contents

第一章 テスタメントを認めない 004
第二章 手作り巨大ロボットの挑戦 021
第三章 スーパーヒーロー世界公開陵辱 034
第四章 新宿公園の淫らな惨劇 080
エピローグ 三日月の夜 136

ローズデバイス
Rose device

「サンダークラップス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷を負い、体内にナノマシンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着して闘う。

オセロット
Ocelot

「サンダークラップス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な美女。
南米の自然の精霊たちに認められたシャーマンで、精霊の力を宿してジャガーの獣人に変身して魔法を使う。

Attention

テスタメント Testament

多発しているオフビート殺人事件に関係するとされる、謎のキーワード。

フレア
Flare

スーパーヒーローチーム
「サンダークラップス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオーダーに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。

スターサンダー
Star thunder

「サンダークラップス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血のミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

サンダークラップス！リボーン テスタメント
CHARACTERS

目次

第一章　テスタメントを認めない
第二章　巨大ロボットの挑戦
第三章　スーパーヒーロー世界公開陵辱
第四章　新宿公園の淫らな惨劇
第五章　三日月の夜

第一章　テスタメントを認めない

鈴堂麗はダイニングキッチンで夕食の天ぷらを揚げていた。

二十代なかばの豊満な美しい肉体をつつむ純白の割烹着は、わざわざ専門店で吟味して選んだ逸品。電気コンロにのった天ぷら鍋も、手にした菜箸も、浅草は合羽橋道具街で買ったプロ仕様。

衣装と道具にふさわしく、天ぷらを操る手つきは軽やかに美しい。

その手がふいに止まった。

美味しそうな音を奏でる鍋の上に、いきなり小さな、身長十五センチの美少女が出現して、油の表面に立っている。

もちろん立体映像。スーパーヒーローチームのサンダークラップスの自宅兼基地である大きな日本家屋を管理する人工知能のアバター小電光だ。キャラクターデザインは何度もモデルチェンジをして、今は黒髪を大きなツインテールに結って、人気アイドルグループ『みらくるワッフル』のピンクのステージ衣装を着ていた。

立体映像の少女は、自分をデザインした主人を見上げる。

「麗様。テスタメントの新たなテレビニュースが入りました。御指示の通り録画をしています」

「ありがとう。今すぐ、みんなを居間に呼んで」

鍋の中から急いで天ぷらを出して、大皿の紙に並べると、コンロを切った。

麗が割烹着のまま居間に入ると、雪に敷いた座布団にもう三人が座っていた。

北原静子は自分用の研究室でのプログラミングを中断して来た。十代後半の華奢な身体に、地味な白いワンピースを着ている。

柳イザベラ美巣と日向燦はおそろいのランニングシャツとトランクス。リトルボルトに呼ばれるまで、二人で軽いスパーリングをしていた。二十代はじめのしなやかで力強い肉体を上気させて、浮かんだ汗をタオルでふいている。

麗は空いた座布団に正座すると、リモコンでテレビをつけた。

画面に人気の女子アナが映り、事件用のきびしい顔つきでニュースを読みはじめる。

『今日、午後三時過ぎに、東京都葛飾区のマンションで、住人の田端憲明さんが射殺死体で発見されました。

現場を捜査した警察によって、被害者は通称『キツツキ』と呼ばれるオフピートの暗殺者だと判明しました。ウッドペッカーは小さな鳥に似た生物を操り、鋭い嘴で脳や心臓に穴を開けるという方法で、わかっているだけでも八人を殺害しています』

「あいつをどうやって見つけたの⁉」

静子が高い声をあげて、座布団から身を乗り出した。

「ウッドペッカーの正体をつかもうと、警察やヒーローたちの間で懸命になって探索していたのに……」

*

オフピート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンDCへ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身で宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、人間を超える肉体を持ち、自在に空を飛び、鮮やかな赤いコスチュームとケープをまとっていた。

男は集まった記者たちへほがらかに笑って、僕は子供のころから『超調子っぱずれ』と呼ばれていた、と語った。

最初に世に現れた超人スーパーオフピートに刺激されたのか、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。

彼らは生まれついての超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物、はては異星人に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフピートと呼んだ。

オフピートたちのある者は平凡に暮らし、ある者は特別な能力を悪用した。

そして多くのオフピートたちが、始祖スーパーオフピートにならってスーパーヒーローとして活躍している。

日向燦。鈴堂麗。柳イザベラ美巣。北原静子。四人も各々異なる理由で、様々な超能力を得たオフピートだ。

燦はフレア。

麗はスターサンダー。

美巣はオセロット。

静子はローズデバイス。

と、ヒーローネームを名乗り、四人でサンダークラップスというヒーローチームを結成している。世にデビューしてから間もないが、人気の高い新進気鋭のチームだ。

*

四人が予想した言葉を、女子アナが告げた。

『田端さんの胸には「遺言に従い、死を送る」と書かれたカードが乗せられていました。

同じカードを残す射殺事件は、これで六件目になります。過去五件の被害者も全員がオフピートの犯罪者でした』

画面に六枚の写真が映った。テレビを見つめる四人の顔がともにけわしくなる。すでに何度も目にした、これまでの犠牲者たちだ。

いずれもサンダークラップスは指手をしたことがないが、二人は派手なコスチュームを着て大都市で暴れる狂暴犯。ヒーローが駆けつける前に射殺された。

もう二人は、表に現れなかった影の知能犯。ヒーローも警察も把握していなかったアジトで撃たれた。

さらに二人は、駆けつけることに刑務所の独房の中で銃弾を受けた。

『連続射殺犯の素性は今もってなにもわかっていませんが、カードに書かれている言葉から、ネット上では「遺言」と呼ばれています』

画面が切り替わり、有名な匿名掲示板のスレッドが映し出された。
『犯罪者を捕まえるだけのスーパーヒーローと違って、完全に退治してくれるんだから、テスタメントこそ本物の正義だ！』
『デスタメントみたいな、悪党を殺すのをなんていうんだっけ？』
『自警団だよ』
『本当に必要なのは、ヒーローじゃなくて、ヴィジランテ！』
「それはダメよ！」
麟の悲声とともに、身体から青白い電光が伸びて、テレビの映像をグニャリと歪ませた。スターサンダーのヒーローネームを名乗る麟は、身体から電気を発して、操る能力を持つ。ついつい感情が昂って放った電撃を急いで自身の体内へ回収して、麟は柔和な表情でチームメイトを見まわす。
「見ての通りよ。テスタメントが犯罪者を殺すたびに、共感する人々が出てきているわ」
美巣が南米育ちらしいオーバーな身振りで、ランニングシャツから露出する両肩をすくめてみせた。
「ボクがちっちゃいころに、ボクが生まれた国にも、『悪隊長』と名乗るヴィジランテのグループがいたよ。全員がかっこつけた黒いコスチュームで、ギャングを何人も殺して、ちょっとだけ人気が出た。でもヒーローの『骸骨貴婦人』に逮捕されて、結局は消えちゃった。ボクもカラベラカトリーナにあこがれて、よくまねしたっけ」
燦は厳しい顔つきで、画面の中で警察やヒーローの不甲斐なさを語る解説者をにらむ。
「ヴィジランテが消えたのも、その時々のヒーローの活躍があったからだ。人々に悪を正義と誤解させる犯罪者は、できるかぎり早く捕らえなくては、あ！」
まだ汗に濡れている燦のランニングシャツの上半身に、背後から麟が抱きついた。
「その通りよ！　偽物の正義に負けないように、サンダークラップスもがんばらなくてはね。さあ、ご飯にしましょう」
「わーい！　麟ちゃんの天ぷら大好きっ！」
美巣が子供のように歓声を放って重い空気を吹き飛ばし、燦と静子の手を握って、猫のように身軽に立ち上がった。

*

燦がコンビニエンスストアの壁の時計を見ると、午前一時七分。
ニュースでテスタメントの六人目の犠牲者が出たという一報を見てから、ちょうど六時間がたった。
燦はホッチキスの針の箱だけをレジに出した。机の引き出しに備蓄する針がきれているここに気づくと、深夜だというのにがまんできずに買いに来てしまった。
自宅兼サンダークラップス基地から歩いて十五分ほどのよく利用するコンビニなので、白いTシャツとダークブルーのデニムパンツにサンダルという気楽な格好だ。針の入った箱をパンツのポケットに押しこんで、コンビニを出た。
燦たち四人が住んでいるのは、昔からある住宅街。もちろん住民は近所にスーパーヒーローチームの基地があるとは知らない。鈴堂麟は金持ちの娘で、古い御屋敷を買って、友人三人と女だけの気楽な共同生活をしている、ということになっていた。
住宅街だけあって、この時間に燦以外の出歩く人影もなかった。
いきなりすぐ目の前に男が出現するまでは。
明かりが灯っていない家のレンガ壁の表面から、男の身体が突き出た。
二十代なかばのチャラい顔が、街灯に照らされる。壁から現れたダークグリーンのジャージの右手は、黒いスポーツバッグの持ち手を握っていた。
壁の前に全身を現した男も、燦に気づいて、二人は同時に声を出した。
「えっ！」
「あ！」
燦のほうが、身体の反応が速かった。ほとんど反射的に右手を伸ばし、ジャージチャラ男の右の手首をつかんだ。
「きみは泥棒か？　あれっ⁉」
指に触れるジャージの布の感触がなくなった。五本の指をすり抜けて、男の右腕が離れる。
（物体を透り抜けるオフビートか！）
ジャージ男が燦へ顔を向けて、得意満面にチャラチャラと笑う。
「悪いねー、おねえちゃーん。また今度ねー」
（こいつ！　わたしをただのおせっかいな通行人だと思っているな）
自分がスーパーヒーローのフレアだとばれていないのはいいが、燦はわりきれない怒りを覚えて、駆けだすジャージ男の背中へどなりつけた。
「ふざけるな！　待て！　ええっ⁉」
意外にもジャージ男の身体が止まった。それどころか背中から燦へ向かって跳びこんできた。
「嘘っ⁉」
燦はとっさにジャージ男を受け止める。緑色の左肩に、ついさっきはなかった赤い色彩が目に入った。間違いなく鮮血だ。
「銃撃！」
真夜中だが街灯の光があれば、燦の人間以上の視覚は昼と変わらずに見える。ジャージ男の倒れ方から、真正面から撃たれているはず。しかしまっすぐに伸びる道路の先に人影はなかった。
「いったいどこから⁉」
燦の目がとらえる。二十メートルほど前方で道路と交わる狭い路地から、銃弾が飛び出した。常識通りなら道路を横断して、反対側の家の塀に当たるはずだ。
実際には道路の中央で、銃弾の軌道がほぼ直角に曲がった。明確な殺意を感じさせる動きで、腕の中でぐったりしたジャージ男へ向かって飛んでくる。
燦は考えるよりも速く右手を男の胸の前にまわし、手の甲で銃弾を受けて、路面へ弾き落とした。普通の弾丸が当たったくらいでは、肌に傷もつかない。

燦は変身してパワーを発揮するタイプのオフビートではない。狂悪な天才科学者によって兵器として造られた燦の肉体は、常に人間を超える頑強さと身体能力を持つ。

ジャージ男の身体を抱いて、夜の中へ呼ばわった。

「何者だ！　姿を見せろ！」

返答は新たな射撃だった。消音器（サプレッサー）をつけているのか、発射音はないが、正面からではなく、背後から、左右から、頭上から、銃弾が曲線を描きながら飛来する。

燦はジャージ男の身体を自分の胸に押しつけて、両腕を素早く動かし、前と左右から来る銃弾を撥（は）ね飛ばし、たたき落とした。背後から来る弾丸は、自分の頭と背中に当たるにまかせる。

「おまえの弾は、わたしには効かない。あきらめろ！」

ふいに射撃が止まった。最初に銃弾が現れた路地から、人影が姿を現した。

ごく普通のダークグレイのスーツとスラックスを着た人物。中には黒いシャツ。そして黒い革靴を履いている。

体型から見て、大人の男。中肉中背。オールバックになでつけた短い黒髪。衣服の上からは身体的な特徴は見受けられない。

唯一目を引くのは、顔だ。

顔に、くすんだ銀色の金属の仮面をつけている。

なめらかな表面には鼻がなく、記号的な二つの目と口だけがあった。両目の穴は黒いミラーシェードになっていて、装着者の目を覗かせない。

単純な造形だが、目と口の微妙な形状で、悲嘆にくれた泣き顔に見えた。

哀しみの仮面から、機械を通して変化させた声が聞こえた。

「遺　言（テスタメント）に従い、その男に死を送る」

「おまえがテスタメントなのか！」

「だが、今ここではテスタメントを執行できそうにないようだ　ゲブッ！」

スーツの腹に、一瞬で距離をつめた燦の拳がめりこんだ。

「うるさいよ」

一撃で意識を飛ばされて、テスタメントはその場に崩れた。

相手が気絶したことを確かめて、燦はスマートフォンで警察とサンダークラップス基地へ連絡した。

*

警視庁の取調室の壁にあるマジックミラーの窓の前に、フレアと年配のベテラン刑事がなかよく並んで、中を覗いた。

スーパーヒーローとして名前が売れた特典は、警察の捜査にある程度参加できることだ。そのためには警察との友好関係を築いておかなくてはならないが。

昨夜、燦はテスタメントを気絶させてから、警察が来るまでの間にチームメイトが持ってきたフレアのコスチュームに着替えて、警察に経緯を話した。

今朝にはテスタメントの取り調べをするという連絡があり、見学を申し出たのだ。

今日もフレアとして警察に来たので、コスチュームを着ている。

フレアのコスチュームは、よく白いチアリーダーと言われる。

外から見るとノースリーブにミニスカートのワンピース。じつはレオタード型のボディスーツのウエストに、スカートに見える布がついた作りだ。

しなやかな両脚には白いロングブーツ。高く隆起した胸では黄色い炎の模様が踊り、背中では腰までの長さの白いケープが下がっている。

フレアが見つめるマジックミラーの向こう側の殺風景な室内では、机を挟んで刑事と被疑者が向かい合う、ドラマでもよくある光景が展開していた。

被疑者は、燦が捕まえたときと同じダークグレイのスーツだが、銀色の仮面は机の上に置かれていた。あらわになった素顔は、四十代くらいの男。これといって特徴のない平凡な容貌だが、薄い唇を強く閉じて、全身から完全黙秘を貫く堅固な決意がみなぎっていた。

事実、フレアといっしょに取調室をうかがっている山田（やまだ）刑事が、髪の薄い頭を振ってぼやいた。

「あの調子だよ、フレアちゃん」

捜査一課の山田刑事とは、サンダークラップスが活動をはじめてからのつきあいで、何度も協力している。

「やつは息を吹き返してから、ずっとだんまりでね」

「山田さん、あいつの素性はわかったのですか？」

フレアの問いに、山田刑事はメモ帳を出して開いた。

「指紋をインターポールに照会して判明したよ。東南アジア各国で暗躍するプロの殺し屋だ。わかっているかぎりでは、日本に入国したのは今回がはじめてだな。

本名は不明だが『バナナショット』と呼ばれてる。ふざけた名だが、自分が撃った弾の軌道を自由に曲げられるオフビートだ。くわしい資料はメールでローズちゃんに送るよ」

「おかしいですね。その能力の暗殺のプロなら、標的の前に姿を見せるのは避けるはずです」

「わしもそれがひっかかってるんだ。フレアちゃんの身体は防弾だ。さっさとしっぽを巻いて逃げりゃあいい。

そもそもバナナショットは金のためにしか動かない生粋の殺し屋だ。愚民を殺してまわる無料奉仕をするやつじゃない。しかし銃弾の線条痕は、六件のテスタメントの殺害のものと一致してる。昨夜の無名のコソ泥に至っては、たまたま目についたから殺そうとしたとしか思えんよ」

あいかわらず沈黙するバナナショットを、フレアはじっと見つめた。視線がひとりでに、机の上に置かれた銀の仮面の泣き顔に誘導される。金属製のシンプルな表情が変化するわけでもなく、今やただの置物でしかないのに。

「あの仮面は、バナナショットの本来のコスチュームなのですか」

「その記録はないね。これまでのやつの仕事ぶりを考えれば、目立つコスチュームを着るタイプではないはずだ。うちの科捜研がざっと調べたが、ただのお面ではなく、なにか仕掛けがあるらしい。とはいえ科捜研の技術では、内部の透視も分解もできなくて困っとるよ。いまのところ、わかっているのはこれくらいだな」

「ありがとうございます」

「フレアちゃんは、今日はこれから新宿のチャリティイベントに出るんだろう。そろそろ時間じゃないかな。なにかわかったら連絡するよ」

「イベントのことを、よくご存じですね」

「わが家はサンダークラップスのファンだからな。今日のイベントにも、長男の史郎が行ってるんだ」

山田刑事がにっこりと笑い、スマートフォンの画面を見せた。大きなサンダークラップスのポスターの前に、山田刑事と二十代の青年がなかよく立っている画像だ。見ているだけで父子が円満な様子が伝わってくる。

「よく似ている息子さんですね」

「そうかい。史郎は、まあ、わしとは正反対の学者志望でね。大学で、わしにはさっぱりわからない難しい外国の本を原語で読んでるよ」

ますます山田刑事の顔が、ニコニコと崩れた。本庁捜査一課の鬼刑事が放射するほのぼのした空気に触れて、フレアも顔をほころばせる。

「今日は屋上から飛ぶかい。テスタメントがいると噂きつけたマスコミが外で騒いでるからな」

「そうさせていただきます」

フレアは山田刑事と連れだって警視庁の庁舎の屋上に出ると、ヘリポートの中心に立った。一礼すると、左右のブーツの底を白いHの文字からふわりと浮き上がらせ、一気にスピードを上げて飛翔する。

青空に消える白い影を、山田刑事が目で追い、つぶやいた。

「スーパーヒーローが飛んでいく姿は、いつ見てもいいねえ」

スマホの画面を指でなぞり、別の写真を呼び出した。昔ながらのフィルムで撮影した古いカラー写真を、パソコンで取りこんだもの。

まだ髪が黒くフサフサの山田刑事が、赤いケープと赤い髪をひるがえす美しい女性スーパーヒーローに抱きかかえられて、青空に浮いている。華麗なコスチュームがぴったりと貼りついた豊満なバストが、若き山田刑事の胸に押しつけられてたわんでいた。この構図ならば、カメラを持つ撮影者も空を飛んでいるはずだ。

若き日の、この写真以上のめくるめく体験を思い浮かべて、ベテラン刑事はひとりで笑った。

第二章　手作り巨大ロボットの挑戦

東京都庁をはじめとする高層ビルにかこまれた巨大公園の一画に設営された特設ステージを、フレアは眼下に見ていた。

フレアが空中で静止している位置は、公園にいる人々からは小さな点にしか見えない高度だ。逆にフレアの目は、地上の様子がよく見える。

広いステージ上では、色とりどりのフリルをヒラヒラさせて、五人組の女性アイドルグループ『ラッキーリーグ』が軽快なパフォーマンスを披露していた。ステージ前では、男が八割、女が二割の大勢の観客が歓声をあげつづける。

（ライブは大盛況だな。さすが人気急上昇中のアイドルグループ『ラッキーリーグ』ね）

フレアは頭の中で、五人のメンバーの愛称を復習した。

（今のセンターはミオミオ。シンボルカラーは赤。緑がランたん。黄色がしいな。青がぶるっち。ピンクがえいみー。よし、完璧）

メンバーに関する知識は、少し前からアイドルにはまっている（本人は地球のアイドル文化を研究中と言っている）麗から教授されたもの。チャリティイベントでラッキーリーグと共演すると言ったときには、心底うらやましがられた。今日も別の場所で用事がなければ、麗は飛び入り参加したに違いない。

ラッキーリーグが三曲を終えると、センターポジションのミオミオがファンに向けて高らかに告げた。

「ここでスペシャルゲストの登場でーす！　わたしたちも大ファンのスーパーヒーロー！　サンダークラップスのフレアだよ！　さあ、みんなでフレアを呼ぼう！」

ラッキーリーグ全員がきれいに声を合わせて叫んだ。

「せーのっ、フレアーッッ！」

「フレアーーーーッッッ！」

観客からも呼び声がひとつの大きなうねりとなって、空へ昇ってくる。

フレアの右耳に入れた通信機が、スタッフの声を発した。

「フレアさん、降りてください」

「了解です」

経験から学んだことだが、空を飛べるヒーローが舞台の袖から歩いて出てくると、人々は大いに落胆する。過去に出演したイベントでも、屋内でもあっても、飛んで現れることを要求された。

フレアは空中で身体を上下逆にして、顔を地面へ向け、自分の名を呼ぶ声の渦へ向かって降下した。公園にいる人々に恐怖や威圧感を与えないように、スピードは調節した。

見上げる顔の列に驚（おどろ）愕（がく）と感動の表情がくっきりと浮かぶのを視認すると、身体の向きを地面に水平にして、人々の頭上を旋回しながら手を振る。

こういうタレントみたいなことは、正面なところ気恥ずかしい。先輩ヒーローたちの慈善活動を見て、これもスーパーヒーローの務めだと信じて引き受けている。

以前に日本で最長の歴史と最高の実力を誇るヒーローチームの『ジャスティスサーカス』が参加したパレードを、沿道から一観客として見物して、四人のサーカスメンが披露したアクロバット飛行に心底から感嘆させられた。その華麗な雄姿もまたスーパーヒーローに必要なことだと確信した。

歓声を浴びながら、ステージ中央の赤いビニールテープの×印に着地した。

「こんにちは、皆さん。サンダークラップスのフレアです」

大歓声がどっと噴き上がる。収まるまで、少し待たなくてはならなかった。

「今日は『ザ・セイヴ』のイベントに呼んでいただいて、心より光栄に思います」

フレアとラッキーリーグの背後にそり立つステージの壁に、ザ・セイヴと大きな赤い文字の列がある。

文字の下には、二人の男がなかよく並ぶ大きな写真パネルが飾られていた。

ひとりは白衣姿の中年の男。鳥の巣のようなもじゃもじゃの黒髪と、分厚いレンズの眼鏡が目立つ、いかにも学者然とした温和な風貌の人物だ。

もうひとりは学校の制服らしい紺のブレザーの若者。髪の質や聡明な顔つきが、中年男とよく似ている。

ひと目で父と息子だとわかる二人の背後には、モニターやキーボード、それに複雑な機械が並び、大学か企業の研究室に見える。

背後の写真へ向けて、フレアは右手を上げた。

「ザ・セイヴは偉大な工学者佐々木伸（さ さ き しん）郎（ろう）博士が十年前に設立しました。不幸にして御子息の佐々木繁（さ さ き しげる）さんが犯罪の犠牲になって亡くなられた後に、佐々木博士は多数の特許によって得た財産を擲って、犯罪被害者の遺児を支援するザ・セイヴ基金を設立したのです。

残念ながら佐々木博士も、ザ・セイヴを設立してから一年後に病気でたくなられました。

しかし佐々木博士の遺志は、大きな実を結んでいます。博士の遺産だけでなく、皆さんからの寄付のおかげで、大勢の子供たちを支援できているのです。今日は、わたしたちサンダークラップスの四人も寄付をさせてもらいます。もちろん四人が働いて得たお金です」

観客の中から、いくつもの驚きと疑問の声があがってきた。予想通りのリアクションに、フレアは笑顔を返す。

「誤解している人がけっこういるけれど、わたしたちスーパーヒーローも普段はちゃんと仕事をしています。毎日会社に行くのは無理ですけどね」

冗談ではなく、四人とも本当に働いている。伝手を頼って、自由がきく仕事を見つけた。麗が故郷の惑星から持ちこんだ財産があれば充分に生活できるのだが、それだけでは人生が味気ないというのが、四人全員の一致した意見だ。

フレアは背後に右手をまわして、ケープに隠れている背中側のベルトに挟んだ白い封筒を出した。中には現金ではなく、寄付金の目録が入っている。ステージの袖から近づいてくる白髪のザ・セイヴ理事長へ、封筒を差し出した。

「皆さん」

バラバラバラバラバラッ！

理事長のスピーチは、頭上からの大きな騒音に押しつぶされてかき消されてしまう。

バラバラバラバラバラバラバラッ！

ステージに大きな影が落ちる。理事長とラッキーリーグとフレアが顔を上げると、巨大なヘリコプターが一機、降下してくる。よく見るヘリではなく、長い機体の前後に二基のローター方式の重用輸送ヘリコプターだ。

重用でありながら、無骨な機体は軍隊ではありえない鮮烈な赤と青と白に塗り分けられている。まるで小さい子供のおもちゃのようだ。

「あの色は！　あいつか！」

フレアはステージを蹴って飛翔し、対空ロケットのごとく空中のヘリコプターの側面にぶつかった。

グラリと大きく傾いた機体を、そのまま全身を使って押す。回転する二基のローターが生み出す力に対抗して、公園の人がいない場所に落とした。

フレアは身体をねじり、背後の人々に大声を放った。

「逃げろ！　これはショーじゃない！　こいつは『機械狂者（マシンマニアック）』だっ、くっ！」

地面に墜落したカラフルな重用ヘリから、太い腕が飛び出して、鉄の拳でフレアの胴体を殴った。いかにフレアの身体が頑丈で、剛力でも、突然加えられた力のベクトルを変えられはしない。殴り飛ばされ、ボールのように地面を八バウンドさせられる。

フレアが全身で地面をえぐっている間に、ヘリコプターが機体の構造を無視して、ギギガガゴリゴリと耳障りなノイズを大音量で奏でながら変形をはじめた。

ヘリコプターからもう一本の金属の腕が生え、二本の脚が伸びて、赤と青と白の派手な機体が直立した。

機首が三つに割れて、中から口ボットの白い頭部が出現した。直線の組み合わせで目と鼻と口をくっきりと造形した、子供向けアニメの主人公ロボットらしい鉄の顔がフレアを見下ろす。

ロボットの頭の上部から、さらに重外なものがニュッと生えた。

人間の上半身だ。

ロボットと同じ配色のパイロットスーツを着たマッチョな男の腰から上が、鉄の頭から突き出している。肉体にぴったりとフィットしたスーツとロボットの白い金属は、溶け合うように融合して、境界線が存在しない。

鋭角的なヘルメットをかぶった顔は、過剰に自信に満ちた笑みを浮かべて、見る人を言い知れない不安にさせる。さらに大きく開いた口から、熱血すぎる大声がドッとあふれた。

「やあ！　はじめてお目にかかるな。サンダークラップスのフレア君！　わが名はグレートスカイキング！」

立ち上がったフレアが憤怒の大音声（だいおんじょう）でさえぎった。

「おまえのことはニュースでよく知っているぞ、マシンマニアック！」

男は自分自身の身体を機械と融合させて、思うがままに変形させて操るオフビート。その能力はインフラを操り、大都市を支配することも可能だといわれている。

しかしマシンマニアックは乗り物と融合して、アニメに出てくるような巨大ロボットを造って暴れるだけに能力を使った。本人は警察やスーパーヒーローと戦うことを純粋に楽しみ、社会に与える被害はまったく考えていない迷惑すぎる愉快犯だ。

出現するたびに異なるスーパーロボットの名前を自称するが、世間からは誰かが名づけたマシンマニアックと呼ばれていた。

「たいせつなチャリティを妨害したことは許さない！」

「いいとも。人気急上昇のフレア君と戦いたくて参上したのだ！　ぼくの鉄拳をもっと喰らえ！」

鉄の足で地面を掘り返して、ロボットが走る。頭上のマシンマニアックが右手の拳を握り、前へ突き出した。

今度はフレアも前へ走り、左のパンチを繰り出す。

フレアの拳と、人間の上体と同じサイズの鉄の拳が、真正面から激突した。サイズだけならロボットが圧倒的だ。

だがぶつかった瞬間に、ロボットの拳がグシャリと内側につぶれる。フレアの左腕が肩まで、ロボットのつぶれた右腕の中に潜りこむ。

左腕を突き入れたまま、右手でも歪んだ鉄の腕をつかんだ。

「このっ！」

力をこめて身体をひねる。バキバキと悲痛な音をたてて金属が裂け、破片をばらまいて、ロボットの右腕が胴体から引きちぎれた。

（マシンマニアックは機械を自分の身体として操っていても、力まかせの脳筋だ。こういうやつの相手は、わたしの得意分野だ）

フレアは自分が肉体の頑強さと怪力だけのオフビートだと自覚している。

（力には力だ！）

もぎ取ったロボットの右腕を振り上げて、残っている左腕の付け根に向けてたたきつけた。

グワシャッ！　と破壊音を公園に轟かせて、金属の腕同士が互いを粉砕する。左腕も付け根からちぎれて、地面に落下した。

「腕があああっ！」

と、マシンマニアックが絶叫した。

フレアが読んだデータによれば、マシンマニアックは融合しているロボットが破壊されても、本人に痛みはない。それでもわざとらしい苦痛と憤怒が混ざった表情で、芝居がかった声をあげる。

「よくもおおおっ！　グレートスカイキングを見くびるな！　グッレートッップウーメラッッンッ！」

両腕を失ったロボットの背後から、二基のローターが前へまわった。背中から伸びる二本のマニピュレーターが、空気を切って回転するローターを支えている。バラバラとうなるこの武器をブーメランと呼んでいいのか疑問だが、こんな物騒なしろものを投げられたら、公園にいる人々に大きな被害が出るかもしれない。

フレアは高速で飛んだ。上ではなく、ロボットの足もとへ。

頭上からローターが回転ノコギリと化して襲ってくる。ぎりぎりでかわすと、すぐ脇で地面が深く掘り返され、土くれが高く散乱した。

ロボットの股の間をくぐり抜け、背後から鉄の右脚を蹴りつけてやる。

巨体のバランスが崩れ、もんどり打って倒れた。自らの重量で、下敷きになったマニピュレーターが二本ともへし折れる。

転倒の衝撃を受けて呆然とするマシンマニアックの両腕を、フレアがつかみ、強く引っぱった。マシンマニアックが自分の胴体がちぎれる心配をしたのか、ロボットの頭部の融合を解いた。フレアに引かれるままにパイロットスーツをピッチリと密着させた下半身がロボットの頭部の外へずっぽ抜けて、地面をずるずると引きずられる。

フレアは腰のベルトの背中側にある小さいポーチから、白いダクトテープを出し、マシンマニアックの手首と足首を縛った。常人の犯罪者を拘束するための道具だが、機械から離れたマシンマニアックにも有効だろう。

自由を奪われ、地面に横たわるマシンマニアックが、むやみに清々した表情でフレアを見上げてきた。唇から覗く前歯も、美容歯科で磨いたように白く輝いている。

「今回はぼくの敗北だ。だが、次は必ずフレア君に勝つ！」

「寝言は刑務所で言え。それよりも軍用の輸送ヘリなんて、どこで手に入れたんだ。おまえはこれまで普通の乗り物をロボットにしてきたはずだ」

「それは最重要機密さ」

フレアがあきれていると、背後からワッと大歓声が押し寄せてきた。ふりかえると、観客たちがスマートフォンやカメラを向けて走ってくる。

プロのマスコミも撮影機器を構えていたが、あきらかに人数が増えている。公園での事件がネットに上げられて、他のマスコミにも知れ渡ったのだろう。

プロだけあって、マイクを握る男女のリポーター、カメラマンに音響スタッフが、観客たちを巧みにかき分けてフレアの前へ並んだ。遠慮のないマイクの砲列がいっせいに突き出される。

「フレアさん！」

名前を呼ぶ合唱が響く。

だが、その後につづくはずの質問の十字砲火が撃たれない。

記者やリポーターの顔が、そろいもそろってカメラの前ではありえないポカンと呆けたものになった。マイクをフレアへ向けたまま、動きを止めて人形のごとくじっと立ちつくしている。フレアはこれまでに何度もマスコミにかこまれたが、もちろんこんな異様な状況ははじめてだ。

「どうしたんだ⁉」

周囲を見まわすと、大勢の観客たちも、まだステージにいるラッキーリーグのメンバーも、理事長とザ・セイヴのイベントスタッフたちも、死んだ魚のような顔つきで立ち止まっている。イベントには興味がなく、ただ公園で散策しているだけのたくさんの人々も、同様の状態だった。

フレア以外の公園にいるすべての人々が、立ったまま意識を失っているようだ。

「なにが起きているんだ⁉」

テレビで見たことのあるリポーターやカメラマンに声をかけ、両肩をつかんで軽く揺さぶったが、なんの反応も示さない。観客の中に入り、次々に同じことをくりかえしてもやはり無反応。

「無駄だ。彼らは私の支配下にある」

音響装置を通した大きな声が、ステージから流れた。

ステージの壁の中央部分がスライドして、大きなモニターが現れた。この仕掛けはフレアも知っている。ザ・セイヴの支援を受けている子供たちの映像を映す予定だった。

しかし明るくなったモニターには、銀色の泣き顔の仮面が現れる。

ダークグレイのスーツ。黒いシャツと革靴。昨夜遭遇した銃撃犯とまったく同一のコーディネート。

テスタメントそのもの。

だが、フレアは叫ぶ。

「おまえは何者だ？」

第三章　スーパーヒーロー世界公開陵辱

大型モニターに映るテスタメントは、バナナショットとは体形が違った。

中肉中背ながら実践的に鍛えたプロの暗殺者と比較して、身体の横幅が狭く、そのくせ背が高く、ひょろりとしている。髪はきれいに整えた短髪。仮面から聞こえる声も、機械を通しているが異なっている。

「おまえは昨日の男とは別人だろう。テスタメントとはグループか組織なのか？」

フレアの問いは、あっさりと無視された。

「私はテレパシーで多数の人間の感情や欲望をコントロールする。今は公園にいる人間の感情を極端に鎮めて、動けなくしているが、別の感情を与えることもできる」

フレアのすぐとなりの若い男の弛緩した顔が、いきなり猛々しい激怒の表情と化した。文字通り頭に血が昇った赤い顔で、そばにいる年上の男の鼻に右手の拳をたたきこんだ。

いっさいのためらいも遠慮もない全力のパンチを喰らった男の鼻がつぶれて、盛大に鼻血が噴き出す。殴ったほうの拳も、指の骨が折れて曲がっていた。

あわててフレアは二人の間に入り、若者の異常な暴力を止めようとした。だが怒りに歪んだ表情が一瞬で呆けた顔にもどり、両腕をだらんと垂らして動かなくなった。

殴られた男も、苦痛を声や態度に出すことなく、ぼんやりした顔でたたずんでいる。

「その男には、猛烈な怒りを与えて消してやった。フレアがこの場から去ろうとすれば、全員を怒り狂わせて、死ぬまで闘わせる。そうなれば私を探し出しても無駄だ。テレパシーで与えた感情は、私の意識が無くなっても十二時間は持続する。効果範囲は公園の中だけでなく、周囲のビル街にもおよぶぞ。

他のスーパーヒーローも警察も、私の言葉を様々なメディアで聞いているだろう。マスコミを集めるために、マシンマニアックが暴れたのだからな。公園に侵入する者がいても、人質に殺し合いをさせる。理解したな」

「こんなことをする意味はなんだ？　テスタメントはオフビート犯罪者を殺すことが目的のはずだ」

「テスタメントには犯罪者だけではなく、ヒーローも載っている」

「オフビートを全員殺すつもりなのか！」

「テスタメントに載りたくないオフビートは、普通に暮らすがいい。マシンマニアック、出番だ」

地響きを立てて、公園に大型ショベルカーが入ってきた。キャタピラでザクザクと地面を掘り返して、倒れているマシンマニアックのそばに横づけして停車する。運転席から灰色の作業服の男が降りて、棒立ちの人々の仲間になった。

マシンマニアックが不自由な身体を芋虫のようにくねらせて、頭をショベルカーの側面にぶつけた。スルッと頭が車体の中に潜りこみ、たちまち全身が車内に消えた。

重機を構成する金属が形を変えはじめる。変形を終えた姿は、お得意の人型ロボットではなく、子供向け番組のロボットの基地めいたもの。とはいえもとが一台のショベルカーなので、巨大建造物ではなく撮影用セットのサイズだ。

基地セットの中央部にそびえる最も高い箇所から、にょっきりとマシンマニアックの腰から上が生えた。

両手を縛るタクトテープがなくなり、得意満面な笑顔でポーズを決める。

「フレア君！　ぼくは復活したぞ！　ぼくのグレートダイナミックベースのグレートギミックを見ろ！」

ネーミングの語彙の少なさを露呈しながら、マシンマニアックが両腕を力強く動かした。基地の表面のあちこちに小さな扉が開き、中から金属のマニピュレーター触手がみたものがいくつも伸びた。これまでの大雑把な破壊行為とは対照的な精密機器だ。

テスタメントが高圧的な命令を下してくる。

「フレアは、機械に身をゆだねろ。反抗すれば観客を殺す」

「わかった」

肯定するしかないフレアの身体に、金属の触手が次々と巻きついてくる。素肌の腕や太腿に金属が触れて、ギュッと締めつけられた。白いコスチュームのウエストや、首も、鉄の触手が密着する。

（重機の車体から作った触手くらい、簡単に引きちぎれる。でもテレパシーを使った脅迫には逆らう方法がない。わたしに馬鹿力以外の能力があればこんなことには……）

両腕を後ろに引っぱられた。金属触手にされるがままにしていると、両手を背中にまわされて、手首をひとつに縛られる。

さらに胴体に巻きついた触手に、強く下へ引かれた。二人の犯罪者の声が同時に聞こえる。

「ひざまずくのだ」

「膝をつけ！」

言われるままにフレアは両脚を屈して地面につけて、屈辱の膝立ちになった。

「男たちよ、目を覚ませ」

（言われてみれば、男ばかりだ）

観客の中に何割かいる女性客は、いつの間にかステージのほうへもどっていた。ラッキーリーグの五人はステージの上に立ったままだ。フレアを包囲する群衆は男だけになっている。

「おまえたちの前にひざまずくスーパーヒーローの情けない姿を、じっくりと観賞してやるがいい」

感情を封じられている男たちが、いきなり変貌した。生きているゾンビ状態の顔に、鮮明な表情が出現する。

全員が同じ顔つきを、そろってまっすぐにフレアに向けた。頬が燃え上がりそうに赤く染まり、瞳をギラギラと輝かせている。だらしなく開いた口からは、熱をはらんだ荒い息があふれ出した。本来なら、白昼の青空の下では見せない顔。大勢の他人の前では隠すべき顔がずらりと並ぶ。

ひと目で欲情の顔だとわかった。ひとり残らず強烈な性欲に駆られている。

フレアが視線を下げると、全員のパンツの前が露骨に盛り上がり、きつくつっぱっていた。今にもファスナーが壊れ、ボタンが弾け飛び、布が突き破られそうだ。

変化は顔と股間だけでなく、多くの男たちが両手の指をひっくり返った虫の脚さながらにせわしなく動かし、両足で下手くそなダンスのステップを刻むように土をにじっている。

こみ上げる肉欲を、目の前の女にぶつけたくてたまらない。それをかろうじて我慢している、と全身でありありと示していた。今すぐフレアに跳びかかってこないのが不思議な状態だ。

（二人目のテスタメントがテレパシーでみんなの性欲をかきたてながら、がまんをさせてる。普段はただロボットで暴れるだけのマシンマニアックが、こんなことをしているのも、操られているからかもしれない）

フレアを見つめているのは、肉眼だけではない。多数のテレビカメラも、拘束されたスーパーヒーローを撮影していた。テスタメントが映る大型モニターの画面が分割されて、複数のアングルから撮影しているフレアのひざまずく姿が映った。

画面から消えたテスタメントの声が、公園に設置されたスピーカーより流れる。

「フレアの姿は、リアルタイムでテレビ局やネットに送っている。スーパーヒーローが貶められる姿を、全世界に見せてやるのだ」

フレアも中継されると予想していた。それでも歯がキリキリと鳴る。

「わたしはいい。他の人たちを映すな！」

「心配するな。フレア以外の出演者の顔はぼかしてある」

モニターの映像が引きになり、フレアをかこむ男たちの群れが映った。言葉通り、全員の顔にバラエティ番組のロケのようにボカシがかかっている。

フレアはホッとしながら、困惑させられた。

（平気で人を操るくせに、顔を隠してやるなんて、テスタメントの倫理の基準はどうなってるんだ？）

「男たちよ。目の前のフレアをどうしたい？」

全世界に放送・配信されているボカシ顔の集団から、火山の大噴火のごとく大声が噴き上がった。言葉は多種多様だが、言っている意味はただひとつ。

「フレアとやりたい！」

「フレアを貫きたい！」

「フレアとセックスする！」

「フレアを犯す！」

「犯すっ！」

「犯ずっ！」

「犯ず――――うっ！」

世界中の何人が聞いているのかわからない欲望の大合唱を、フレアは直接全身に浴びせられた。露骨な言葉をわめく男たちが襲いかかってこないのが、かえって不気味に感じてしまう。

ステージのスピーカーの音量が上がり、テスタメントの言葉が男たちの叫びに重なった。

「男たちの叫びは本心から出たものだ。スーパーヒーローなどといっても、欲望の対象にすぎない」

フレアはステージへ向けて凛とした声を放った。

「その嘘は何度も聞いた。人の精神を操るオフビート犯罪者は、みんな同じことを言う。自分は人が隠している本心を表に出しただけだ、と。そんな言葉はすべてまやかしだ！」

フレアの真摯な言葉も、邪悪なテレパシーの影響下にある男たちには、なんの意味もなかった。

当然マシンマニアックの心にも響かない。いくつものマニピュレーターが、背後からフレアの顔の前にまわった。笑いをふくんだ親切ごかしな声が響く。

「フレア君、動くんじゃないぞ。きみの身体を傷つけたくないからな」

複数のマニピュレーターの鉤爪が白いコスチュームの胸の部分をつかみ、前へ引っぱった。ピンと伸ばされたコスチュームに、別の種類のマニピュレーターが迫った。その先端では、金属の刃が高速で振動している。

フレアは機械の意図を察して、思わず叫んでいた。

「やめろ！」

うなりをあげる刃が、コスチュームに触れた。耐久力の高い防弾防刃の材質だが、カッターの威力のほうが強かった。振動音とフレアのうめき声が混じり合う。

「あっ、あああ」

やすやすと白い生地が楕円形に切り落とされた。地面についた両膝の前に落ちた布を、マニピュレーターの爪がつまんでそそくさと持ち去っていく。

「ああ……」

フレアの嘆息が、地鳴りのごとく響く男たちの歓声に押しつぶされた。

「見えた！」

「丸出しだ！」

「胸が見えた！」

「フレアのおっぱいが見えたぞっ！」

コスチュームに開いた楕円の穴から、乳房が突き出している。サンダークラップスで二番目に豊かなバストは、強靭な胸筋に支えられて、コスチュームに開いた窓の外へ迫り出し、青空から降りそそぐ陽光を浴びた。

左右の乳球はまろやかで絶妙な曲面を形作り、優美な魅力を放っている。素手で巨大ロボットを破壊した力強さとは対照的な印象だ。

二つの豊乳の頂点では、淡い桜色の乳輪が小さな円を描く。

さらに乳輪の中心から、同じ色の小粒な乳首が咲いた。まだ勃ち上がってはおらず、ささやかなふくらみでしかない。

フレアは銃弾をものともしない素肌に、痛いほど感じた。自分を包囲する男たちから飛んでくる視線の集中豪雨を。多数のカメラの向こうにいる人々の瞳の存在を。

それを悦びとすることは、フレアにはできない。ただひたすら無数の恥辱の針で突き刺される苦痛を感じるばかりだ。羞恥の業火に焙られて、欲望の目にさらされる胸から全身へ不快な熱さに侵されていく。

フレアの脳裡に、スーパーヒーローの歴史で、悪党の手で観衆の前で裸にされた多くの女性ヒーローの姿と名前が浮かんだ。彼女たちの多くは、勇敢にもその後もヒーロー活動をつづけたことに、フレアは感銘を受けていた。

今はじめて、先達が味わった苦しみが、想像していたような生やさしいものではないと痛感した。周囲の男たちが正気ではなく、罪がないとわかっていても、屈辱は少しも軽減しない。

「フレア君に、グレートダイナミックベースのグレートシークレットウエポンを味わわせてやろう。喰らえ！　エクストリームシャワーボンバー！」

マシンマニアックの豪快な叫びに乗って、背後から新たに二本のマニピュレーターが伸びてきた。今までの鉤爪やカッターとは異なり、先端は小さい穴の開いたノズルになっている。

ピュルッ！　ピピュッ！

粘つく噴射音とともに、二つのノズルから透明な物質が飛び出し、それぞれが左右の乳房にぶつかった。

「ああっ！」

それは透明な粘液だった。二筋の粘液が胸の曲面をたき、ねっとりした飛沫（しぶき）を四方へ散らしては、また胸の肌に降りかかる。ノズルが粘液を噴きながらバストの周囲を動きまわり、乳房のすそから頂上の乳首まで、執拗に隙間なくコーティングしていった。下乳からねばねばした水滴が細い糸を引いて、ボタボタと地面へ落ちる。

しかし落ちたのはほんの一部にすぎず、大部分の粘液は胸の上に残り、肌の中に浸透していく。自分の胸で起きている異様な現象が、フレアの記憶を司烈にえぐった。

「あっ、なっ、こ、これはっ！」

フレアが放った驚愕の声に、テスタメントが応じる。

「気がついたか。フレアもよく知っている『闇の寄生体（ダークパラサイト）』の分泌液を改造した媚薬だ」

「ば、馬鹿な！　あれは」

ダークパラサイトは、『寄（マスターパラサイト）生（いんび）王』と名乗る男が操る恐るべき寄生生物だった。サンダークラップスだけでなく、多くの有名な女性スーパーヒーローたちが寄生されて、淫靡な罠に囚われた。意識を残したまま肉体の支配をダークパラサイトに奪われ、敵が望む通りに恥態をくりひろげさせられた。

鈴雷麗がつづるサンダークラップスの記録に『パラサイトクライシス』と表題をつけられた事件だった。

「ダークパラサイトはすべて、政府の極秘の管理施設に封じられているはずだ」

「考えてみろ。マスターパラサイトが秘密基地を築き、だいそれた計画を実行するために必要な資金を、どこから手に入れたのか。あの男はダークパラサイトの分泌物だけを、強力な媚薬として闇市場で売りさばいて、資金を稼いだ。その結果が、今ここにある」

「嘘だ！　あんなものが外に出まわっているなんて、はうっ！」

胸にカッと火がついた。左右の乳房の内側に灯った火は、たちまち乳肉全体を包みこむ炎へと燃え盛る。

「はくあああっ！」

火炎の高熱の中で、粘液媚薬にまみれる胸が変化していく。自分が見ている前で、もともと豊かな乳房が張りを増して、バストサイズがアップした。乳輪の桜色が鮮明な濃さを加える。

なにより男たちの視線の攻撃にさらされて固く縮こまっていた左右の乳首が、ムクムクと成長していく。たちまち限界までしこり勃ち、美しいピンクの肉の筒と化した。高さも、太さも、何倍にもなり、痛々しいまでにフルフルとわななきつづける。

胸の変異はあまさずカメラで撮影され、ステージのモニターにも大写しになった。公園の男たちが新たな驚嘆の歓声を渦巻かせる。

「すごいやらしいおっぱいだ！」

「ヌルヌルの乳首がギンギンに勃ってる！」

「スーパーヒーローなのにエロすぎる！」

「フレアのエロ乳だ！」

「エロエロ乳首だ！」

欲望があふれかえるコーラスの中で、胸全体の変貌が終わると、身体が燃えつきて灰になると思わされた高熱の温度が下がった。普段の体温よりも少し高い熱を残して、そのほとんどは別のものに変化した。

猛烈な疼きが襲いかかってくる。

おぞましい媚薬粘液によって性感が増幅され、全開にされてしまう。胸を形作る細胞のひとつひとつが、フレアの意志を離れて、ズキズキと疼きつづけて訴えた。

（気持ちよくなりたい！）

（快感が欲しい！）

（悦びをよこせ！）

（はああああっ！）

ひとまわり膨張して重たげに震える豊乳からの荒々しくてせつない叫びが、頭の中にグルグルと響く。フレアは内なる声とデュエットしてしまう。

（触りたい！）

後ろ手に縛られた両手が小刻みにわななき、金属触手の表面がこすれ合って、カチャカチャと鳴った。

（ああ、胸に触りたい！　いや、だめっ！）

フレアの力なら、たやすく両腕を拘束する金属触手を引きちぎれる。今すぐにも両手を自由にして、疼き狂う乳房を揉みたくてたまらない。

（だめ！　だめだめ！　だめだめええええっ！　触手をはずしては絶対にだめえっ！）

人質を危険にさらしたくないという強い意志が、かろうじて腕の力を抑えた。少しでも意志が削がれれば、戒めを破壊してしまうだろう。

しかし耐え難い乳房の咆哮（ほうこう）が、新たな妄想を呼ぶ。

（もし、テスタメントから胸を揉め、と命令されたら……）

と、頭の隅に浮かんだ。公園の人々を殺すという脅迫を大義名分にして、胸の激しい疼きを癒せる、という希望が生まれる。フレアは首を強く振って、すぐに否定した。

（なんてあさましいことを考えているの！　ひっ！）

「あああああっ！」

胸に強烈な刺激が穿（うが）たれた。二本の新型マニピュレーターの先端が背後から伸びてきて、左右の腕をかすめ、つやつやと黒光りする先端を二つの乳房の外側に押しつけられる。

「あひいいっ！」

フレアが悲鳴をあげて、身体を大きくのけぞらせた。マニピュレーター（マニピュレーター）の黒い先端は、勃起（ぼっき）した男根の形状を模している。バイブレ

ーター機能を内蔵した張形（ラッパー）だ。乳房のやわらかい肉の中に、二本の人工ペニスが埋まって、ヴヴーンと低音でうなりながら振動を送りこんでいる。

強力に揺さぶられた細胞のひとつひとつが、シャボン玉のようにプチプチと弾けて、快感の火花を次々と咲かせた。

（気持ちいい！）

機械の亀頭で嬲（なぶ）られて喜悦を感じることを、頭の中で否定するよりも早く、脳内に素直な言葉が閃いてしまった。

（気持ちいいっ！）

一度出現した言葉は消すことができずに、脳内をループする。言葉がいっそう官能を補強して、自分の肉体がマシンマニアックに操られるように、乳悦を大量に搾り出していく。

破壊的な攻撃には驚異の耐久力を誇るフレアの肉体は、愛撫には弱い。邪悪で異常な科学者の父親に、そう造られてしまった。

歓喜の声を高らかにあげる胸の細胞がドロドロに蕩（とろ）けて、張りつめた乳房の内側に熱くねばねばしたものが充満しているように感じる。二本の黒い人工ペニスが乳肌をへこませて移動すると、震える二つの乳房がうねうねと形を変えて、大きく上下左右に跳ねまわる。

歓喜のダンスを踊らされるバストの表面から、粘液が四方へ大きく飛び散った。すかさず二本のノズル型マニピュレーターから新たな媚薬が噴出して、再びヌラヌラとまぶしていく。胸の穴の周囲のコスチュームも濡れて、素肌にねっとりと密着した。

フレアは膝立ちのまま後ろ手に縛られた哀れなポーズで、風に嬲られる草のように身体を揺らしつづける。

「あっ、ふあああっ！　だめえっ！」

膝やブーツが地面からフワリと浮き上がった。

無意識に飛行能力を発揮していた。よがり声をあげて激しく身悶えながら、地面から数センチの位置でフワフワしてしまう。

フレアが重力を無視して空中に浮き、自由に空を翔ける能力の理屈は、本人にもわかっていない。サンダークラップスのチームメイトや他のスーパーヒーローたちからは、精神で重力をコントロールしているのだろうと言われたが、フレアには自覚がまったくない。

今もまた望まぬ快楽の大波にさらわれて、自覚のないまま身体が重力から解き放たれていた。金属触手で身体を縛られていなければ、手から離れた風船のようにどこかへ行ったかもしれない。

マシンマニアックがニヤリと笑い、敵の必殺技を見た歴戦の戦士のごとき口調で告げた。

「これは愉快だ。快楽に悶えながら浮き上がるとはな。もっと多くの武器で攻撃したら、フレア君はいったいどうなるんだ」

グレートダイナミックベースからさらに何本もの黒いペニスが突き出た。ヴヴヴヴーンと合唱しながら、フレアへ向かって伸びてくる。

「あっひいいいっ！」

複数の人工の亀頭が、集中砲火さながらに四方八方から二つの豊乳に押しつけられた。柔肉の球体がいびつに歪められて、別の生物と化したようにブルブルと痙攣（けいれん）しつづける。黒光りする亀頭と亀頭の狭間から顔を覗かせる勃起乳首が、左右バラバラに動いて、乱暴なダンスを披露する。

胸の内側でいくつもの振動がぶつかり、反響して、薄けた乳肉をグチャグチャにかきまわされた。

「はひい！　ひっあああああっ！　あくっううううっ！」

快感の大渦がスピードを増し、大きさを広げていく。渦に呑まれて、空中に浮かんだフレアの身体が上下左右にガクガクと揺さぶられ、膝やつま先が地面を削った。

「よしっ！　いよいよフレア君の自爆スイッチを押してやる！」

マシンマニアックの勝ち誇った言葉が、フレアの耳に入った。意味がわからない。

しかし、すぐに思い知らされる。

乳肉を多数の淫具に押されて、二本のピンクの肉筒が前へ突き出ていた。

左右の突出乳首が、同時に正面から振動するパイプの先端に押しつぶされ、乳肉に埋められる。蹂躙される乳首から二本の快感の槍が放たれ、心臓を貫き、脊髄の神経の束に突き刺さった。

「あおおおおおお！」

フレアは空中で強くのけぞり、フルフルと痙攣しながら固まった。とどめの一撃が背骨を駆け上がり、脳の中で大輪の絶頂の花を毒々しく咲かせる。

「おおおおおおおお、イクッ!!」

恥ずかしすぎる言葉が、フレアの意志を離れて喉をせり上がり、口から爆発的にほとばしった。

「イクうううう！　イクイクイク！　イッちゃううううう!!」

クライマックスの叫びが、ステージの音響装置から何倍にも増幅されてあふれ出た。

モニターには、眉根をきつく寄せてこわばる美貌がアップになる。絶頂の衝撃で きつく凝固した顔は、一転して蕩けて、だらしなく弛緩する愉悦の表情を見せた。

フレアの叫びを追って、男たちのどよめきが湧き上がった。

「イッた！」

「フレアがおっぱいでイッたぞっ！」

「おっぱいだけで絶頂したあ！」

「エロすぎるう！」

テスタメントのテレパシーに支配されている男たちは、あいかわらずその場にとどまって、ひたすら欲望だけをグツグツと昂らせていく。今にも頭の血管が切れて、大規模な血の噴水が現れそうな勢いだ。

男たちから吹きつけてくる淫欲の熱風にさらされて、フレアは体内に反響する絶頂に全身を波うたせた。

「はあああ……あんんん……んっうう……」

フレアが果てると、人造男根の群れはそろって胸から離れていった。いびつに歪められた豊乳が美しいまろみを取りもどして、悦楽の残響を味わうようにタプタプと揺れている。

「……う、んく、んん……」

浮力が失われて、身体がストンと地面に落下した。

軽い衝撃で、上体がガクンと前へ傾く。うつむいた頭の中で、恥辱と後悔がむせかえる。媚薬のせいだとしても、世界中の人々の前で果ててしまったことに変わりない。

（こんな、こんなこと……これから、どんな顔をして、ヒーローでいつづければいいの……）

噴いている間にも、胸の疼きは連続していた。媚薬粘液を吸収した肉体は、エクスタシーを極めた後も凶悪な効果に侵されたまま。身体を前に伏せているので、重力に引かれて少し下向きに伸びた乳房の内側では、熱い対流がねっとりと渦巻いている。二つの乳首も強烈に勃起したまま地面を指して、ビリビリと電気を流されているようだ。またパイプで責められれば、一度三度と絶頂してしまうに違いない。

「ああっ！」

胴体に巻きつく金属触手が動き、身体を持ち上げられ、再び膝立ちの姿勢にされる。

マニピュレーターの鉤爪がコスチュームのミニスカートをつかみ、捲くめくり上げられた。白いコスチュームに包まれた下腹部と尻、それに素肌の太腿が全開露出する。

「フレアのパンツが見えた！」

どよめきが爆発した。

フレアのコスチュームはボディスーツのウエストにスカート状のフリルがついているデザインなので、見えているのはパンツでもショーツでもない。そのことは女性スーパーヒーローのローアングル映像を狙うパパラッチや投稿マニアのおかげで、世間によく知られている。

それでも男たちは、男の本能にしたがって叫ぶ。

「パンツ見えた！」

「フレアのパンツが丸出しだ！」

「パンツ、パンツ！」

パンツの大合唱を浴びて、フレアの全身が燃える思いがした。普段のヒーロー活動では、スカートがめくれようと、破かれようと、まったく気にしていない。

（なのに、こんなにも恥ずかしいなんて……）

胸を露出しているのも恥ずかしいが、それとはまた別のものがある。ステージのモニターには、動きを封じられて、粘液でヌラヌラと輝く乳房を放り出し、いくつもの機械の手でスカートをめくり上げられている情けない姿が大写しになっていた。

（ぶざますぎる……）

苦悩するフレアのあらわな股間に、マニピュレーターのカッターが接近してきた。

「ああっ、や、やめろ！」

思わずフレアは大きく身じろぎする。両腕を縛る金属触手がきしみの悲鳴をあげて、危うくちぎれそうだ。

「まずい！」

ハッとして、触手が壊れないように懸命に身体を抑えた。それでもわずかに震えてしまう下半身の白い布に、高速振動する鋼の刃が触れて、無抵抗で切り裂かれていく。

「あっあああああ！」

カッターが機械の精密さと正確さを発揮して、その下から右の太腿の付け根を通過すると、尻のなかばまで行ってUターンした。そのまま再び両脚の間を通り、へその下までもどる。

はらり、と一枚の白い布が、フレアから離れた。

ビチャリと地面に落ちた布きれは、絶頂を強制された女の体液でじっとりと湿っていた。

テレビのカメラマンのひとりが地面に這いつくばり、フレアの前に迫ってくる。逃げたくても逃げられない女性スーパーヒーローの下半身をローアングルで撮影する映像が、ステージのモニターに大々的に映された。

コスチュームの股間部分に細長い穴を開けられて、女性器と肛門の周囲だけが外に露出させられた。ただ秘部を接写するだけでなく、フレアの引きつった表情も的確に入れている。

あきらかに放送禁止の映像を、テレビはどうしているのかはわからないが、ネットの画像は世界を駆けめぐっているだろう。全地球に配信されているフレアの恥丘は、透明な粘液に被われて、ふっくらと美しく盛り上がっている。だが今も肉唇をピッチリと閉じて、女の秘密を内に隠していた。

すぐ後ろの肛門も、汗まみれながら、まだ若い蕾のようにきつくすぼまっている。

男たちは静かだった。今までと違って息を呑み、じっと女性スーパーヒーローの最大の秘密を凝視している。全員の反応が同じなのも、テレパシー支配のせいかもしれない。

下品なコーラスがなくとも、高熱の視線が自分の下半身に凝集していることは、いやというほど感じる。

視線をさえぎって、フレアの顔の前をマニピュレーターが横ぎった。

先端のノズルが目に入り、表情が歪み、引きつる。

「ひいっ！」

媚薬粘液があらわな女性器と肛門に噴きつけられた。媚薬のほとんどが、股間に、下腹部に、そして尻に吸収されていく。

「あ、はあああっ、あううっうううっ！」

たちまち紅蓮の火炎が下半身に燃え盛り、すぐに鎮火した。後には下半身を冒す苛烈な疼きが残る。膝立ちの腰がひとりでに動き出した。前に並ぶ男たちと力メラの列へ見せつけるように、媚薬まみれの剥き出しの恥丘を何度も突き出してしまう。

肉眼とレンズの前で、フレアの二つの花がほころびはじめた。恥丘が縦に割れて、内側のピンクの花弁を空気と視線に触れさせる。肉襞はすっかり充血して、ぷりぷりとふくらんだ。自らの花蜜に濡れて、キラキラと陽光を反射する。

クリトリスもひとりでに包皮を剥いて、高くしこり勃った。

尻の奥の蕾もゆるみ、もの欲しげに広がった。愛らしい肛門を指先でつつけば、やすやすと呑みこむように映っている。

湧き起こる下半身の疼きに共鳴して、胸の疼きも増幅していく。悩ましく全身をくねらせて煩悶するフレアの前に、また新しいタイプの三本のマニピュレーターが現れた。

三本の先端には、黒く細い毛が密生する小さい刷毛になっている。一本は右の勃起乳首の前に移動した。もう一本は左の乳首の前。そして最後の一本は下腹部へ潜りこみ、ふくらんだ陰核にゆっくりと接近する。

（ショベルカーから刷毛を作れるのだろうか？）

と、フレアの頭をかすめる。直後に、三か所で同時に電撃が走り、思考をすべて吹き飛ばされた。

乳首と女芯に刷毛が押しつけられ、肉の筒と粒を磨くように小刻みに動き出す。

女の最も敏感な三か所が、邪悪な媚薬によっていっそう鋭敏にされている。普通なら感じすぎて激しい苦痛になるはずだが、すべて膨大な快感となって全身に押し寄せた。

普段ならなんの脅威でもない小さな毛の束が生む悦楽で、神経をえぐられ、精神を削り取られていく。

「おあああああ！　くひいっ！　ふあああああああああっ！」

乳首とクリトリスを責められはじめてからごくわずかな時間で、快感の限界に達した。

目の前がまばゆい白光に埋めつくされる。意識が光に包まれるなかで、またも両脚が地面からフワッと浮き上がった。

フレアは浮上しながら、頭をのけぞらせる。また意図しない声が喉から飛び出し、青空へ放たれた。

「イクううっ！」

空中の身体が弓なりにのけぞり、開いた女性器を男たちへ向かって差し出す姿勢になる。

「くあああああ、イックうう――――――うううううッッ!!」

叫び声が太陽へ向かって立ち昇ると同時に、開いた肉襞の中心からどっと透明な蜜汁があふれた。熱く芳醇なエクスタシーの体液が、自身の太腿をびしょびしょに濡らし、地面を湿らせる。

「イッた！」

「フレアがまたイッたっ！」

「乳首とクリトリスで絶頂したぞっ！」
「エロすぎるうっ！」
フレアの全身から力が抜けた。弛緩した身体が浮力を失う。
膝立ちの姿勢で地面に落下して、そのまま上半身が後ろに倒れた。膝を曲げた両脚を大きく広げて、背中を地面にぶつける。
刷毛責めから解放された豊乳がわずかに横に広がり、荒い呼吸に合わせて上下に揺れつづける。たわんだ乳球の頂点で屹立する二つの乳首が、優雅に小さな円を描いた。
男たちと力メラへ向けて開いた太腿の奥では、肉唇が震えて、内側から透明な悦びの蜜をトプットプッと吐き出しつづけている。
「はあああ……んんん……んうう、う……」
横たわるフレアの左右の乳首に、再び黒い刷毛が触れてきた。果てたばかりの勃起乳首の過敏な表面を、みっしりと生えた毛の束の先端でチクチクとつつかれる。
「んんっお！　おおうううう！」
二度目のエクスタシーの熱がまだ冷めていない女の急所を責められて、後ろ手縛りの身体を地面の上でのたうたせた。
大きく開いてわななく股間にも、もう二本の刷毛があらためて潜入してくる。硬く膨張したクリトリスに、二回目の衝撃が轟いた。
「あっひいいいい――っっ！」
身体が釣り上げられた魚のように大きく跳ねる。フレアの身悶えに合わせて、三本の刷毛を操るマニピュレーターが精密に動き、乳首と肉芽から外れることなく、執拗に責めたてくる。
一度絶頂を迎えた三つの快感の源泉は、より激しく刺激に反応して、より大きな肉悦の波をあふれさせ、フレアをより高い絶頂へと押し上げていく。
左右の太腿がさらに広がり、腰が高く持ち上がった。ヒーローコスチュームから覗く女性器と肛門が、全世界へ向かって激しく突き出される。
爆発する白い閃光に、再びフレアは焼かれた。
「イクうっ！　あひいいい！　またイッちゃううっ!!」
ジュッ！　ピシュッ！　ジュバアッ！
華々しく開いた女花の奥から、カメラへ向けて蜜液が次々とあふれ出る。
男たちの歓声が波うつ中で、刷毛の攻撃は止むことなく続行された。フレアは全身をのたうたせて、望まぬ快感のクライマックスを、かすれた声で高々と訴える。
「ひいいいっ、またイクふうううう!!」
先の絶頂の高波が引くよりも速く、次の絶頂の大波が轟音を立てて押し寄せてくる。
「イックふうう……んんんああ、イクうう!!」
エクスタシーにエクスタシーが重なり、いっそう頂上が高くなっていく。フレアは悶えつづけ、途切れることなく叫ぶことができない。
「またイふっ！　ひあ、ヒフッ！　イヒィ！」
四回、五回、六回と絶頂が連なり、喉から出るのはひとつづきの絶叫になる。人を超えるパワーに満ちた肉体が生みだす望まぬ叫びは、スピーカーを使わずとも、広い公園全体に響いた。
「イイイッおおおおうう――――！　クオッ、あひおおお！　おおーッッ――おおうう――ッッッ!!」
フレア自身にも、見つめる男たちにも、いったい何回果てたのか、わからなくなるころに、ようやく三本の刷毛が乳首とクリトリスから離れた。
「はああああ……あんん……ん、んん、あああぁぁ……」
地面に横たわった全身から力が抜けて、だらしなく両脚が伸びる。体内にはまだ快感のパルスが駆けめぐり、身体のあちこちがピクンピクンと痙攣した。
しかしフレアが休むことは許されなかった。
「あう」
身体に巻きつく触手で、強引に引き起こされる。
ミニスカートの裾をつかむ狗爪が開いて、白い布を解放した。ヒラヒラと落ちて、露出する女性器と肛門を隠す。今まで見えていたものが見えなくなることで、逆に男たちの想像力をかきたててざわつかせた。
膝立ちの姿勢にもどされてもまだぼんやりとしているフレアの耳に、テスタメントの命令が突き刺さった。
「前戯は終わりだ。これからフレアは男たちの相手をするのだ。わかっているだろうが、男たちの要求にはけして逆らうな。逆らえば、大勢の死人が出る。では私が順番を選ぼう。最初はおまえだ」
フレアをかこむ人の壁の奥から、まわりの男たちをかき分けて、ひとりが前へ進み出た。ライトグリーンのトレーナー、ダークブルーのデニムパンツ、黒いスニーカーという軽装だ。
男のトレーナーを目の前にして、フレアは思わず息を呑んだ。
頭をねっとりと包む高熱がさっと引いていき、意識が冷たく醒める。
（わたしだ！）
トレーナーの前面には、フレアの勇ましい立ち姿が大きくプリントしてある。サンダークラップスの公式グッズのひとつだ。売り上げの一部を、自分たちが信頼を置く福祉団体に寄付する契約で、製作販売を許可した。正しく寄付されているかは、静子が監査している。
脳の片隅で、スタジオでプロの写真家から言われるままにポーズを取らされた恥ずかしい記憶がかすめた。
だが自分自身の写真よりも、それを着ている二十歳前後らしい青年の顔が、もっと強烈なショックをフレアに与えた。
間違いなく、今朝、スマートフォンの画面で見たばかりの顔。フレアは思わず名前を口に出しそうになるが、唇を噛んで声を押しとどめた。
（山田刑事の息子さん！　史郎くん！）
目の前に現れた山田史郎の顔は、父親のスマホの画面を飾っていた好感の持てる笑顔とは正反対だった。飢えた獣じみた容貌は、同一人物でありながら印象がいちじるしく異なっている。
（この大勢の中から、わざわざ山田刑事の息子さんを選び出すなんて、偶然のはずがない。テスタメントはどうやって史郎くんのことを知ったの!?　警視庁の内部にまで食いこんでいる組織？　だとすれば昨夜のテスタメントが近所に現れたのも、偶然ではなく、サ

ンダークラップスを探っていた⁉）

フレアは状況を推理しようとしたが、史郎の欲望をあらわにした表情に、意識を奪われてしまう。

見上げるフレアの顔に、史郎がぎらつく瞳光をそそぎながら、デニムパンツの前のファスナーを引き下げた。

フレアが覚悟をしていたモノが、眼前に出現した。デニムパンツの中心から放たれたペニスは、猛々しく勃起していて、握り拳を高く突き上げたようだ。

欲望をみなぎらせる肉幹全体が、燃える石炭のように紅潮している。先端の亀頭は完全に剥けきって、より毒々しい赤色に染まり、今にも内圧で弾けそうだ。

ひざまずくフレアから見れば、ちょうど顔の前で男根がたぎっている。勃起からあふれる熱気が顔に押し寄せて来て、男の体臭に鼻腔を衝かれた。

頭上で、史郎が声を爆発させる。

「フレアッ！」

（史郎くん）

音声も拾われているので、名前を声に出して呼ぶわけにはいかない。

「フレアッ！　フレアッ！　フレアフレアフレアアアッ！」

史郎が名前を叫ぶたびに、フレアの顔前で亀頭が激しく前後に揺れる。叫びに合わせて、分身が情熱のダンスを踊り狂った。

「フレアが好きだった！　フレアとやりたかったッ！　女の人にぼくのモノを見せるのは、フレアがはじめてなんだっ！」

世界中に自分が童貞だと大声で告白したことには、史郎はまったく気づいていなかった。未経験の男根がピクンピクンと震えながら前に迫り出し、フレアの顔に接近してくる。

（史郎くんのが、ああ……）

鼻の先端に、男根の裏側が触れた。反射的に後ろへ逃れようとしたが、頭を史郎の両手でつかまれる。普通の男の手など簡単にふりはらえるが、テスタメントの脅迫を思い出して、じっとがまんするしかない。

頭を固定されると、勃起ペニスがさらに強く鼻に押しつけられる。肉幹に浮き上がった尿道が鼻先から小鼻をすべり、右の頬に密着した。亀頭が右目の下まつ毛に触れる位置に止まり、視界にぼんやりと鈴口が入った。

たまらずフレアの口の端からうめきがこぼれる。

「う、うう……こんな……」

ステージのモニターに、フレアが顔に亀頭と肉幹を密着させられている映像が映されていた。

史郎が男のシンボルを女に触れさせる初体験の感動を、世界へ伝えた。

「はじめてフレアに触った！　フレアに会うために、直前にシャワーを浴びて！　身体を一番高いソープで洗って！　ここまで来たんだ！　いい香りがするだろうッ！」

かすれてアクセントがおかしくなっている叫びとともに、獣の牡が体臭でなわばりをマーキングするかのように腰をくねらせはじめる。カメラを通して、世界中にデニムパンツの尻の動きが伝わっていく。

「うむっ！　くふっ！　んっんっうっ！」

フレアは顔の表面で亀頭が上下左右に動きまわる感触を、鮮明に味わわされた。熱く硬いローラーで、顔の筋肉を強引にえぐられているようだ。

「くうっ、あああ……」

スーパーヒーローの活躍を報じるニュースではありえない音色の声を聞いて、史郎も獣の咆哮をあげた。

「ううわああっ！　うっおおおっっ‼」

背筋を硬直させ、両腕でフレアの頭を抱きしめて、下半身に美貌を押しつける。史郎自身の腹とフレアの顔に強く挟まれて、鈴口から精液が盛大に噴出した。生まれてはじめての女を相手にした射精で、史郎の意識が真っ白に灼ける。

フレアは右頬から額まで、ゼロ距離で若い精液を浴びせられた。高温のどろどろが肌の上に広がる。かろうじて鼻の穴には入らなかったが、きつい男の匂いが嗅覚に充満した。情けなくて閉じた唇から声を洩らしてしまう。

「ううううん……」

史郎のデニムの尻がブルブルと何度も震えて、射精を終えた男根を女性スーパーヒーローの顔に押しつけつづけた。精液を潤滑剤にして、亀頭と顔の肌がニチャニチャと音を鳴らしてこすれる。

「ああああ……ああ……」

熱い息を長々と吐き出して、亀頭がフレアの顔から離れた。二人の間に白い糸が何本も伸びて、ふつふつと切れ、垂れ下がった。

白濁粘液にまみれた女性スーパーヒーローの顔を見て、男たちが声をあげ、手を打ち、足を踏み鳴らして大騒ぎする。

「フレアが顔射された！」

「フレアが顔に出されてる！」

「精液をぶっかけられた！」

「最高にエロいぞっ！」

公園に巻き起こるカーニバルじみた音声とともに、フレアの精液を浴びた顔も、地球を駆けめぐる。各国の宇宙ステーションにも伝わっているかもしれない。

大量の射精をあこがれの女性スーパーヒーローの顔にぶちまけた後も、史郎の勃起の勢いは少しも衰えていない。今も尿道から鈴口まで、精液がたっぷりと充満していそうだ。

男根を、獲物を狙う蛇のように振りたてて、また名前を叫んだ。

「フレアアッ！」

そしてデニムパンツのポケットからハンドタオルを取り出し、フレアの顔から自身の精液をていねいにぬぐいはじめる。

「ええっ⁉」

「フレアにはきれいでいてほしい。フレアはきれいでいなくちゃだめだ！」

史郎の予想外の言動に困惑するフレアの顔に、再び亀頭が突きつけられた。今度は右手で肉幹をつかみ、精液をふき取った面に押しつけてくる。

閉じた唇に硬い亀頭が触れた。不快感が走って、うめき声がこぼれる。

「んくんっ！」

史郎のほうは歓喜の声を放つ。

「キスした！　フレアがぼくのにキスしたっ！」
（これがキスなんて、くっ、ううっ、んんん）
フレアの上唇が、亀頭に押されてめくり上げられた。史郎の腰がくねり、亀頭が上下に掘れて、前歯の列をなぞられる。
「咥えて！　ぼくのをっ、フレアの口で咥えてっ！」
史郎が甲高い声で命令すると、背後の男たちから疑問の声が湧いた。
「フェラチオか！」
「童貞なのに、フェラチオでいいのか⁉」
「フレアがせっかく胸もアソコも出してるのに！」
「どうしておっぱいとアソコへ行かないんだ⁉」
後ろから押し寄せる当然の言葉の数々も、史郎の耳には入らなかった。全神経が自分のペニスの先端に触れるフレアの唇に集中している。頭の中では、アダルトビデオで見た女の口で愛撫される映像への憧憬であふれかえっている。テスタメントのテレパシーで秘めたる欲望を掘り起こされ、煽りたてられた結果だ。
史郎が右手で肉幹を支えたまま、左手でフレアの後頭部をつかんだ。
「早くっ！　ぼくのを、フレアの口の中に咥えるんだあっ！」
後ろから頭を押されて、フレアはしかたなく口を開いた。
歯で史郎を傷つけないように注意して、たぎる亀頭をそろそろと歯列の奥へ納めていく。四方から力メラの列が自分の顔を狙うが、止めるわけにはいかない。
「んっ、んんん、んふ……」
「おおお、フレアに入ってる！　フレアの口の中に、ぼくのが入っていくう！」
舌の上に亀頭が乗った。表現のしようがない味がじわりと広がり、フレアは息苦しさにたまらずむせてしまう。
「えむうっ！　うぐうううっ！」
新たな命令が、ステージのスピーカーから下された。
「なにをしている。そいつを満足させるのだ。フレアのフェラチオのテクニックを見せろ。射精をさせなければ、そいつは死ぬことになる」
「んんむ……」
フレアは口で奉仕して男を悦ばせる技術など持っていない。これまでの男との交わりに、いい思い出がない。相手はすべて女性スーパーヒーローを屈服させ、陵辱することに血道を上げるオフビート犯罪者どもだ。
（でも、史郎くんを射精させてあげなくては……）
真摯な目つきで史郎の顔を見上げて、おずおずと舌を亀頭の表面に這わせはじめる。フレアと視線をからませる史郎の顔が、キユッと引きつった。
「いいっ！　気持ちいいっ！」
パンツの左右の尻たぶが強くすぼまり、デニムの布地を噛みしめた。
「うおおお、気持ちいい！　フレアの舌に舐められてるう！　くううっ、たまらないっ！」
フレアは舌の動きを速くした。ピチャペチャという粘つく音色が、自分の身体を伝導して耳にもとどく。
ただ単調に舌を動かしているだけだが、早々と童貞青年の二度目のスイッチが入った。
「おうっ、フレア、出すようっ‼　はじめてフレアの中に出すううっ！」
フレアの後頭部を押さえる左手の指が、無意識に髪を強く握りしめた。フレアでなかったら、毛髪が何本も引き抜かれる強烈な握力だ。同時にデニムパンツの腰が勢いよく前へ突き出される。意図した動きではなく、はじめての口内射精の反射運動だ。

「おおおおうううっ‼」
「んぐうっ！」

フレアは突進してくる亀頭に喉の奥をえぐられ、熱い精液をぶちまけられた。
「ふんんんんんんっ！」
口を奥までふさがれているので、吐き出すことができない。そのまま精液の奔流（ほんりゅう）は喉から食道へと流れ落ちていく。男の絶頂の証しが、胃の中にどろどろと収まる。
見つめる男たちが驚嘆の声を爆発させた。
「フレアが飲んだ！」
「精液を飲んだ！」
「すごすぎる！」
「うおおおおお！」
対照的に史郎が静かに息を吐いた。
「はあああ……ああ……」
全身から力が抜けて、デニムの尻が地面にへたりこんだ。フレアの口から亀頭がすっぽ抜けて、唾液と精液が空中に飛び散り、フレアの露出した乳房に降りかかる。
「はおおううっ！」
フレアの身体が大きく跳ねた。マリオネットの糸の操作を失敗したようにガクガクと揺れ動き、精液をつけた美乳が踊るように盛大に弾む。
「あっおおおお！　くっふうう！」
わずかな精液に触れて、胸に染みこむ媚薬粘液が活性化した。疼きがより苛烈になり、乳肉の中でいくつもの鼓動がドクドクと打ち鳴らされる。
悩乱する女性スーパーヒーローの顔の前に、再び亀頭を突きつけられた。
それもひとつではない。
ハッと顔を上げると、腰を抜かしたままの史郎のを右に別の男たちが何人も並び、下半身のファスナーやボタンを開いて、勃起男根を突き出している。
すべての亀頭がパンパンにふくれあがり、燃え盛る緋色に染まっていた。肉幹には青黒い静脈が浮き上がり、ひとりひとり異なる模様を描く。
火を噴きそうな肉の砲列の向こうには、フレアの様々なポーズが並んでいた。サンダークラップス公式トレーナーやシャツを着た男たちばかりで固められている。
（テスタメントが意図的にわたしの服を選んだのか！）
スーパーヒーローを貶めるには、最適の方法かもしれない。どこかで見ている悪党どもが大喜びして、卑猥な歓声を口汚く発しているだろう。
眼鏡の痩せた青年が、焦った声でわめいた。大声に合わせて、トレーナーの胸では、フレアの緊張で少々こわばった笑顔が上下に揺れる。
「フレア！　ぼくのチンチンを咥えろ！」
柔道着が似合いそうなマッチョ青年の胴体では、Tシャツにプリントされたフレアの決め顔が横に伸びていた。
「俺のもしゃぶれ！」
ぴっちり七三分けの青年は、真面目な会社員にふさわしい地味な紺のスーツとパンツ。首に締めたネクタイでは、拳を前に突き出して空を飛ぶポーズのフレアが何人も連なり、おしゃれな雰囲気の模様を作っている。
「私のペニスも舐めて欲しい」
フレアの口ゴ入りキャップをかぶる青年。自作のフレア写真バッジで全身を飾る青年。様々なフレアグッズを身につけて、勃起を振りかざす大勢の男たちがそろって吠えた。
「フレアが、俺たちのモノにフェラチオするんだ！」
テレパシーでそそのかされているためなのか、全員が同じことを声高に要求して、亀頭を振りたてる。男たちの赤く染まった表情と猛る男根を見ると、今すぐにも順番を争って殺し合いになりそうに思える。それでいて忠実な飼い犬が餌を前にして、飼い主の許可をじっと待っているように、抜け駆けする者はいない。
肉欲の大合唱に、テスタメントの声が重なって反響した。
「全世界の視聴者に告ぐ。フレアの公開陵辱はじまったばかりだ。これからもっと惨めな恥辱を舐めつくすことになる。テスタメントに従い、すべて女スーパーヒーローがこうなるのだ！」
恐るべき宣言は、地球のあらゆる場所で高らかに鳴り響く。
フレアは強く決意した。
（……やるしかない）

第四章　新宿公園の淫らな惨劇

ズクズクする胸の動きをがまんして、最初に目についた史郎と同年代の眼鏡青年の下半身へ身を乗り出し、顔をひくつく亀頭へ近づける。眼鏡のほうから手で亀頭の位置を調整して、フレアの唇を迎えた。

口を開き、亀頭全体を一気に含む。再び熱く硬い男の肉塊が、舌の上に充満する。

眼鏡の奥で瞳がギラギラと輝き、はしゃぐ小犬のような高音の歓声が噴出した。

「おおう、フレアが咥えたっ！　フレアに咥えさせたぞっ！」

悦びの叫びを無視して、フレアは懸命に舌をくねらせて、亀頭の先端をつつく。

眼鏡も童貞なのか。それともテレパシーでギリギリまで昂らされていたためなのか。史郎と同じスピードで若い肉棒が暴発して、ヌルヌルの弾丸で女性スーパーヒーローの喉を撃った。

「うぐふうううっ！」

また亀頭で口をふさがれたまま、精液をすべて飲み下すはめになる。

「んっ、んく、くむ……」

唇で肉幹を挟んだまま、コクコクと喉が動く様子が、鮮明なアップで大モニターに流された。フレアをかこんで直接見つめる男たちだけでなく、公園中の男たちがモニターの恥態を見て、精液を飲んだ！　また飲みこんだ！　と大合唱をくりひろげる。

「ひひゃあああ、フレアに自分の精子を飲ませたぞ～～」

眼鏡がふにゃふにゃした勝利の声をあげて、口からペニスを引き抜いた。再びわずかな精液と唾液の混合物が裸の胸に滴り落ちる。

「はっあああっ！」

フレアの身体がまた上下に踊った。熱したフライパンに水滴が落ちたように、素肌の上でジュッジュッと蒸発音が鳴った気がして、豊乳のあちこちが燃える。胸だけでなく、女性器と肛門を露出した腰もうねうねと円を描いた。

「はふううう……うんん……」

高熱をはらんだ吐息を洩らしながら、三人目の男根に顔を寄せる。すぐ目の前に、自分の顔があった。アップの笑顔の表面に、着用者のたくましい筋肉の凹凸が浮き上がっている。

マッチョ青年が穿くカーキ色のショートパンツの中心から伸びる男の武器も、体格にふさわしく前の二人よりも雄渾だ。フレアは今まで以上の息苦しさを覚えながら、張りつめた亀頭を口内へ呑んでいった。

「むぐうううっ！　んんっむうっ！」

眉根を寄せるフレアの顔を、マッチョ青年が血走った目で見下ろして、Tシャツに浮かぶ大胸筋をピクピクと痙攣させた。

「最高だあ！　フレアが俺のモノをフェラチオしてるぞお！」

フレアの頭をごつい十本の指がつかみ、髪をクシャクシャとかきまわしはじめる。自然と頭を揺さぶられて、フレアは舌だけでなく口内のそこかしこを亀頭でグリグリとこすられた。

「んっ、くっ、ぶふ、むううう……」

太い肉幹と唇の隙間から小刻みなうめきをこぼして、フレアは懸命にマッチョの分身をしゃぶる。

「うほおおお、ほおおう！　出すぞお！　フレアに出してやるうう!!」

ゴリラじみた雄叫びとともに三度目の白い濁流（だくりゅう）が、轟々と喉から胃へ流れ落ちていく。

「んっんんうぐぐうううう！」

フレアは胃の中で粘つく水音が鳴っている気がした。胃液が白く染まっているようだ。マッチョがペニスを引くと、また胸に白い滴がばらまかれて、疼きの火花が狂おしく咲き誇った。

「んんっ、ふあああ……あうんんん……」

身体をくねらせ、媚薬粘液と汗で焼らつくバストを揺らして、四人目の勃起を咥えた。

「ふんん……くふう……」

それからいったい何人の男根を咥え、舐めて、どれほどの量の精液を胃に収めたのか、とても覚えていられなかった。連続フェラチオに参加したのは公園に集まった男たちの一部にすぎなかったが、何度も口内射精をされて、何度も飲み下す姿を、あますず撮影されて、世界に流されつづけた。

普通の人間ならとっくに嘔吐（おうと）しているが、フレアの肉体の頑健さが逆流を防いでいる。肉体は平気でも、心のダメージは蓄積されていく。それでいて精液に触れた身体の疼きは強くなるいっぽうだった。自分は男の肉体に奉仕しながら、自分自身は二度絶頂を迎えた後は放置されていることに、猛烈な抗議の叫びをあげつづけている。

まるで肉体の訴えに応じるように、聞き慣れてしまった声がかけられた。

「フレア、次は胸で、ぼくのを挟んで！」

顔を上げると、やはり史郎がじっと覗きこんできている。

「それは」

しばらく無言を貫いていたテスタメントの声が、再び公園に響いた。

「今度は、フレアがパイズリするのだ。胸を使って男たちに奉仕しろ」

（史郎くんをまた最初に還元なんて、やはりテスタメントはサンダークラップスと山田刑事のつきあいを知っている。でも史郎くんはもう二度も射精しているのに、つづけて大丈夫なの？）

フレアは心配になるが、目の前の男根は変わらず痛々しいほどにいきり勃ったままだ。テスタメントのテレパシーの支配下に置かれているかぎり、史郎も他の男たちも肉欲が衰えることはないのだろう。

史郎の背後では、居並ぶ男たちが声を合わせていた。

「パイズリ！」

「パーイズリ！　パーイズリッ！」

「パイズリパイズリパイズリ――ッッ！」

大声援をかけられて、フレアの両手を背中で縛る金属触手が、するすると ほどけて解放された。

（自分でやれということか）

両腕をブルンと何回か振ってほぐすと、胸の前へまわした。望んで覚えたわけではないが、これまでの悪党との闘いでパイズリのやり方は知っている。左右の乳房を下からすくい上げるように両手で支えた。

「あんんっ！」
十本の指が乳肌に触れ、乳肉を軽く押すだけで、ビリビリと快感の電流が発生した。媚薬が浸透したバストは恐ろしいほど敏感だ。
（ああぁ、これだけで気持ちよくなってしまう）
思わず、気持ちいい、と声に出してしまいそうになり、喉を締めた。だが、左右から二つの乳房を寄せてくっつけると、電極のように新たな愉悦の放電がバリバリと放たれる。指が触れていない二つの乳首が、ビクビクと身悶えた。
「あっ……あああ……んんくっ……」
（やっぱり感じる。気持ちいい……こんなあさましい状態で、パイズリなんてしたら、どうなってしまうか……）
心は強くためらう。だが電流が駆けめぐるバストは、もっと刺激が欲しい！　もっと気持ちよくなりたい！　と訴えてくる。
「あの、史」
つい名前を呼びそうになり、あわてて言いかえた。
「あなたのを、わたしの胸の間に挟ん」
「フレア、入れるよっ！」
最後まで聞かずに、史郎が分身をしっかりと構えて、戦場の槍兵のごとく突進してくる。ズリュッ！　と、湿った音を鳴らして、乳房と乳房が密着する狭間に亀頭が潜りこんだ。
「あっひいいいいっ！」
連続フェラチオの間は放置されていた胸が、男の武器で貫かれて、一気に沸騰した。密着する乳肌同士を亀頭でえぐられると、内側の柔肉がドロドロに溶けて、グラグラと泡立つようだ。
「あくうっ！　はっおおおおお！」
フレアはまともな言葉を紡げず、テスタメントに命じられた史郎への奉仕をすることもできなかった。ただ両手で乳房を支えて、胸を貫かれた快感の衝撃に身をゆだねるだけになってしまう。
身体をこわばらせる女性スーパーヒーローの胸に、史郎の腰がぶつかる。フレアと比べればごく非力な男の力で、乳肉が押しつぶされ、たいらにひしゃげた。左右の勃起乳首がパンツのデニム生地にザラザラとこすられて、二筋の熱い快感がドッと噴出する。
「はっんんんうううっ！　あ、あああ」
熱く濃厚な喘き声を吐くフレアの胸の奥を、亀頭に突かれる。
史郎も歓喜の声をあふれさせた。
「最高だっ！　フレアの胸は最高に気持ちいいっ！」
興奮しきった大声の賞賛に乗せて、全力で腰を引く。
猛烈な勢いで後退する亀頭に、豊乳の内側を削られ、異なる悦楽の渦が逆巻いた。
「ひいいっ！　ふあああっ！」
よがり声を連続させるフレアの胸の狭間から、亀頭が完全に抜け出た。女の悦びの汗に濡れる肉棒全体が、陽光にキラキラと輝く。
「うおおう、フレアッ！」
史郎がまた雄叫びを放って、再び豊乳へ突撃する。また一瞬で肉幹の付け根まで乳肉の中に埋まった。
「くひいいいっ！　き」
フレアの身体の奥から、今まで口にするのを避けていた言葉が、あふれ出ようとする。
「きいっ……」
懸命に抑えようとしたが、どうしようもなく言葉が決壊した。
「気持ちいい！　気持ちいいっ！」
フレアの羞恥も知らずに、史郎が高らかに応える。
「ぼくも気持ちいいよ！」
史郎が心底からの憧憬の瞳でフレアを見つめて、自分の左右の手のひらを優しくそっと、豊乳を支えるフレアの両手の甲に当てた。
「あ、えっ、なに？」
「二人で、もっと気持ちよくなろう」
告げる声も優しく感じられた。童貞の青年が、想像上の恋人と語らうように。しかし重なった史郎の両手が、容赦のない強さでフレアの両手を押した。
「んんんっ！」
フレアはたまらず首を左右に振り、うめき声をあふれさせた。
もともと亀頭と肉幹に密着していた乳肌が、さらにきつく押しつけられて、ペニスの形にへこむ。マシンマニアックが押しつけたバイブの振動よりも、生きた男のシンボルが発する息づかいと血流を、より強い愉悦と感じてしまう。

「はっんん、そんなに強くされたら、ふあああっ！」
史郎の両手が互い違いに激しく動き、左右の乳房を強引にすり合わされる。なめらかな肌と、張りのある柔肉が、燃え盛る男根をこすりたてた。中に挟んだペニスをしごくための道具としてあつかわれている。
（ああ、史郎くん！）
この乱暴な行為も、テレパシーで欲望の奥底から掘り起こされたものだ、とフレアは理解した。脳を支配されなければ、妄想することはあっても実行することはなかっただろう。妄想に罪はない。
その思いも、史郎に乳肉を揉みくちゃにされて、男根をしごかされていると、彼方へ押し流されていった。外側と内側からの強烈な刺激が生む快感の洪水で、まともな思考を根こそぎ奪われる。強制された悦楽に屈服する言葉が、何度も口から飛び出した。
「いいっ！　気持ちいい！　あああ、ダメっ！　ダメえええっ！」
「フレア、今度はもっとやれるよっ！」
すでに二度も大量に放出しているだけあって、史郎は余裕があった。童貞青年が射精のトリガーを引く前に、生きた淫具にされている女性スーパーヒーローのほうが限界に達してしまう。左右の乳房の中で同時に爆発が起きて、全身の神経に甘美な衝撃が駆けめぐる。
「イクうッ！」
フレアは両手と胸を史郎に捕らえられたまま、全身をブルッと痙攣させた。ミニスカートの中で触れられてもいない肉襞とクリトリスがピクピクと蠢き、膣口（つぼ）がひとりでに開いた。身体の奥から透明な女の体液が噴出して、地面で飛沫がピシャッと跳ねる。
「イクイクう！　イッちゃふうううッ!!」
「ぼくは、まだだよっ！」
史郎が叫び返し、さらに乳房をうねうねと動かすスピードを上げて、望むままに自身のペニスを強烈にしごきまくる。フレアは見上げる両目から大粒の随喜の涙をこぼして、史郎へ懇願した。
「やめて！　イッてるのに、責められたら、あひいいっ！」
嬉みこんでも、フレアのファンの手は止まらない。逆にさらに激しく追いたてられる。
「きひいいい！　もっとイッちゃうう！　イクイクイクんんんッ!!」
左右の乳肉が男肉にこすられて、新たなエクスタシーの炎が噴き上がるたびに、ひざまずいた股間から飛沫が散った。
「イクッんんほおおおうう!!」
連続絶頂を訴える高い叫びが重なるなかで、ついに史郎もスイッチが入った。
「ぼくも出すよ！　フレアの胸に射精するうっ!!」
言葉のままに乳房の狭間の奥で、白い溶岩が噴火する。押しつけ合う胸の隙間から精液があふれ出て、つぶされた乳肉の表面にヌルヌルと広がっていく。フェラチオのときに精液の滴が胸に落ちるたびに感じた異常な感覚を、何倍にも増幅して味わわされる。
「ああ、染みる！　精液が染みこんでくるう！　くおあああああっ！」
史郎がペニスを引き抜いても、フレアは精液まみれの胸を前に突き出した姿勢で、ぶるぶると身悶えつづけていた。
「はああ……ええっ!?」
震える乳房に、白いタオルがかけられた。またも史郎がタオルの端を握っている。どこから入手したのか、顔にかかった精液をふき取ったハンドタオルよりもサイズが大きいフェイスタオルだ。
「胸をきれいにするよ」
史郎が真剣な顔で告げ、ていねいに胸の上や内側の精液を拭きぐっていく。フレアの身体をきれいに保つことが、フェラチオやパイズリと同じレベルの欲望らしい。不思議なことに、周囲のペニスをそびえ勃たせている男たちも、史郎の美化作業が終わるのをじっと待っている。
やがてフレアの胸から精液が一滴残らずふき取られると、新たに白いチノパンから伸びる男根が前に勃った。

さっき口で奉仕をしたなかにはいなかった青年だが、フレアは顔を覚えていた。今は強いられた性欲を全身からダラダラと滴らせているが、それでも真面目そうな顔立ちは隠せない。

身につけているのはサンダークラップスグッズの衣服ではなく、青いTシャツ。胸には白い文字で『ザ・セイヴ』と記してある。数日前の打ち合わせのときに会い、イベントがはじまる前にも言葉を交わした『ザ・セイヴ』基金の若いスタッフのひとりだ。

不幸な身の上の子供たちへの支援について真摯な意見を語ったその口で、青年スタッフが言った。

「フレア、次は私にパイズリしてくれ！」

スタッフの両手の指で左右の勃起乳首を強くつままれ、グイッと引っぱられた。肉芽の先端から青白い火花を散らす電極の針を突き刺されたような衝撃が走り、すぐさま歓悦の稲妻となって体内を貫かれる。

「ひきぃいいいいいいっっ！」

まだパイズリがはじまってもいないのに、フレアは絶頂に到達した。

「イクッ！」

全身から力が失われて、上体が後ろへ傾く。つままれた乳首と乳房が体重で長く引きのばされて、地面に倒れる前に身体を支えた。普通の人間では耐えられない姿勢のまま、フレアは絶頂の痙攣をくりかえす。

「イクーーッ！　イクイクッ！　イッちゃうンンンンンッッ!!」

「うわあっ、フレア！」

スタッフが驚いて乳首を離すと、エクスタシーに漫ったまま背後の地面に倒れた。解放された乳房が胸の上で大きく弾み、前後左右に踊り狂う。

「はあああ……あんんんん……んくくくう……」

バストのダンスが収まり、フレアは土の上にぐったりと横たわる。荒い息をつく身体の下に、左右から他の男たちの手が入って、持ち上げて起こした。

背中や両腕についた土の汚れを、また史郎が新たなタオルではたき落とし、熱意をこめてきれいにする。

「……い、今のは……わたしは……」

フレアは唖然とした。自分自身の肉体が見せた異常なエクスタシーが信じられない。だが考える暇はほとんど与えられない。スタッフがあらためて胸の間に、男根を挿入してきた。テスタメントの叱責が飛ぶ。

「なにをしている。パイズリをつづけろ」

あらためてフレアは両手で自分の胸を持ち上げて、スタッフの肉棒全体を胸に挟み、柔肉でぴっちりとつつみこんだ。

「はああ」

「うおおう、すごく気持ちいい！」

史郎と違って、スタッフの青年は今はじめて勃起ペニスをフレアの身体に触れさせた。テレパシーで煽られつづけた性欲が、一気に暴発してしまう。

「うおおおおお、出るううっ!!」

スタッフの腰が豊乳に押しつけられ、亀頭が乳房の狭間から顔を出した瞬間に、精液が噴き上がる。白い水滴がまっすぐに上昇して、フレアの喉と顎にぶつかって四散した。

射精を終えてすぐに、スタッフが叫ぶ。

「まだ終われない！　もっと胸でしごいてくれ！」

スタッフの腰がわずかに引き、放出したばかりの亀頭が乳房の内側に沈む。しかたなくフレアは両手で精液にまみれた左右の胸をくねらせ、挟んだ男根をしごきはじめた。たちまちヌチャニチャと鳴る粘つく音色とともに、新たな刺激と快感が乳房の中に蓄積される。

「あああ、いいっ！」

「おっぱい、気持ちいいっ！」

叫ぶスタッフは自分から動こうとはしない。じっとして女性スーパーヒーローの豊乳奉仕に身をまかせ、顔を輝かせている。

「フレア、二度目はいっしょにイコう！」

陽気に声をかけてくるスタッフを、フレアは反射的ににらみつけようとする。

「勝手なこと、はうううっ！」

けわしい視線は一瞬で崩れて、甘い声がこぼれてしまう。男にパイズリをするのは、同時に胸を責める自慰をしているのと変わらない。媚薬粘液と精液が混交したローションが、淫欲で張りつめた乳房の官能をますます深くしている。

「ああ、ダメッ！　またイッちゃう！」

「フレアといっしょにイケるう！」

タイミングは、わずかにフレアが早かった。白いコスチュームの背筋がヒリヒリと震えて、ミニスカートがヒラヒラとはためくほど腰がくねる。

「イックううううッッ!!」

「出るうっ!!」

ワンテンポ遅れて、乳房の狭間に二度目の精液がたっぷりとぶちまけられた。密着する乳肉同士の隙間から白い泉がヌルヌルと湧き出す。

「はぁぁあああ……」

エクスタシーの息を長々と吐くフレアの胸から、スタッフのペニスが引き抜かれた。いくつもの白い滴が糸を引いて、地面に落ちていく。

「……ぁぁあああ、ひゃっ！」

胸に、いきなり冷たい水がそそがれた。驚いて背筋を伸ばすフレアの目に、透明なペットボトルを傾ける史郎の姿が映った。手に持っているのは、公園の自販機で売っているミネラルウォーター。ただタオルでふくだけでは大量の精液を落とせないと思ったのか、水で洗っていく。

女が監禁される映像作品で、ヒロインが物か家畜のように水洗いされる場面がよくあるが、それとはまったく違う。史郎の手はあくまで優しく、ていねいに、慎重をこめて、フレアの身体をきれいにしていった。

とんでもないことをされていることには変わりないのに、不思議とフレアは好感を持ちそうになっていた。

しかし前のペニスの精液を洗い落とされると、すぐに別の勃起ペニスが乳房の間に押し入ってきた。

三人目は、ラッキーリーグの口ゴと写真をプリントしたTシャツを着ていた。首にかけたタオルには、推しメンバーの愛称 ♡ぷるっち♡ の名前が大きく並ぶ。イベントに集まった男たちの大部分を占めるラッキーリーグのファンだ。

フレアはもうしわけない気分になりながら、また乳房で男根をしごきはじめる。すぐさま新たな愉悦の炎が、胸から全身へ燃え広がっていった。もう止めようがない快感の言葉が、すぐに喉から流れ出した。

「あううう、気持ちいいっ！　たまらないひ！　すぐにイッちゃう！　イクッ！　イクイクイクうううッッ!!」

フレアは新たな肉棒を挟んでしごくたびに、豊乳エクスタシーを連続させる。男たちも次々と胸の中で射精していった。ひとりが出す毎に、必ず史郎がミネラルウォーターと新品のタオルで胸を洗浄してくれた。

何人目かもわからない男根を射精に導き、胸に精液を浴びて、すぐに洗われた後に、フレアは膝立ちの姿勢を保てなくなり、仰向けに地面に倒れた。

やわらかい。

なぜか全身に硬い地面ではなく、寝具のやわらかさを感じる。

「ええっ⁉」

驚いて首をまわすと、目の前には地面ではなく、白いものが広がっている。地面にマットレスが敷かれて、フレアはその上に横たわっていた。男たちがどこからか、運んできたようだ。

身体に巻きついていた金属触手もなくなっていた。コスチュームの胸と股間部が切断されていなければ、公園でのんびりと日光浴をしている体勢だ。

「フレア、いよいよだよ」

史郎がスニーカーを脱いで、マットレスに乗って宣言する。なにがいよいよなのかは、フレアにもよくわかった。

そしてテスタメントの声が、わかりきったことをはっきりと言葉にする。

「さあ。フレアで童貞を卒業するがいい！」

（フェラチオとパイズリをして、童貞もなにもない！）

と、フレアは胸の内でどなったが、口には出さないでいた。目の前に立つ史郎を見上げると、不思議な安堵感が湧いてくる。

（一番目が史郎くんでよかった……かもしれない……ああ、正常な判断ができていない！）

困惑するフレアの前で、史郎がフレアをプリントしたトレーナーをすばやく脱ぎ、地面に投げ捨てた。現れた裸の上半身は予想外に引き締まっていて、いわゆる細マッチョという体形だ。父親の山田刑事によれば学者志望だそうだが、充分に肉体も鍛えている。間を置かずにデニムパンツのベルトをはずし、トランクスといっしょに下ろして、蹴り捨てる。

一糸まとわぬ姿になった史郎は、恥じる素振りはかけらもなく、股間の男根同様に堂々と屹立していた。

（史郎くん……）

今までのデニムパンツからペニスを覗かせているだけよりも、はるかにまともな印象を受ける。

（……史郎くん……本当に、ついに……）

フレアは立ち上がろうとしたが、史郎のほうが先に膝をついた。左右の膝を両手でつかまれて、ミニスカートの中から伸びる両脚を広げられる。

開いた脚の間に、膝立ちの史郎が進んできた。フレアは抵抗しようとすれば、簡単にできる。両脚を強く閉じれば、たとえ史郎が甲冑を着ていても押しつぶせる。でも、できるはずがない。

（今まで通り、史郎くんにされるがままでいるしかない）

史郎の手が伸びて、太腿のなかばまでを被っているスカートの裾をギュッと摑った。これから重い鋼鉄の扉を開こうという力の入りかただ。防弾で耐火仕様だが軽いフレアのコスチュームを、大重量であるかのようにソロソロと持ち上げる。

一度はマシンマニアックのマニピュレーターで軽々とまくり上げられて、剝き出しの女性器を全開にさせられたフレアだが、じりじりしたスカートめくりに息を呑み、心臓を高鳴らせ、頭の奥がスキズキと振動した。

目の前の史郎も瞳をギラギラと輝かせ、堅く口を閉ざしたまま、ゆっくりと両手を動かしている。

背後に居並ぶ勃起ペニスを丸出しにした男たちの壁からも、言葉はひとつも出ない。声なき熱気が砂嵐のごとく押し寄せてくる。

ついにめくれた裾が、『八』の字の形に開いた太腿の付け根に到達した。

そこで一気にスカートを腹の上へ乗せた。

フレアの耳を、史郎の絶叫がつんざく。

「見えた！」

男たちの声の爆発が、衝撃波と化して激突してくる。

「見えた！」

「見えた！　見えた！」

「見えた！　見えた！」

「見えたあああ――――――っ！」

あまりにも恥ずかしい大合唱に、フレアは両手で耳をふさいだ。すぐに手首に金属触手が巻きつき、耳から引き離される。

「わかった」

ひと言口にすると、納得したように金属触手がほどけてもどっていった。両手は所在なくマットレスにつけるしかない。

史郎の目の前では、白いボディスーツの楕円形の切断箇所から恥丘が覗いていた。一度剃毛でクリトリスを覆られてエクスタシーを迎え、さらに乳絶頂の反響で何度も女蜜を噴いたが、今は秘唇を閉じて、清楚な雰囲気をたたえている。濃いピンクに染まって、高々としこりきっている乳首とはアンバランスだ。

史郎がフレアの顔と股間を交互に見つめて、優しく聞こえる声音でたずねた。

「フレアの中を見ていいよね」

スーパーヒーローはしかたなさうなずく。

「ええ」

左右の秘唇を指先でつままれた。

「あんっ……」

それだけで声が出て、内腿がブルブルと震える。恥丘が遠慮なしに大きく割り広げられると、内側から透明な体液がどっと流れ出て、史郎の指をべっとりと濡らす。

「これが、フレアの」

史郎はそれ以上口にしなかった。生まれてはじめて間近に見る女の秘密に感動して、声も出なくなっている。
しかし背後で何人もが野卑な声で、その部分の名前をいっせいに呼ばわった。
「おま○こ！」
「オマ○コッ！」
「フレアのおま○こだあっ！」
沈黙する史郎の右手の人差し指で、ぷりぷりと充血した肉襞をかき分けられ、膣口をつつかれた。フレアはピクンッと身体を跳ねさせて、痛れる声を洩らす。
「んく、んあああっ！　入ってくる！」
世界公開陵辱が開始してから、まだ一度も膣に挿入されていなかった。マシンマニアックにも乳首とクリトリスを嬲られただけだ。挿入のないまま敷えきれない絶頂を迎えた肉体に、男の指が一本だけ潜り込んでくる。
「あうんんっ！」
フレアの十本の指が、マットレスに食いこむ。危うく指先で引き裂くところだ。
本人の意志を無視して、膣肉が人差し指に押し寄せる。飢えた子犬が母犬の乳首にしゃぶりつくように、史郎の指に密着した。それだけで膣内に愉悦の波動が走る。
「ひっ！　あああ、感じるう！」
さらに膣壁が勝手に蠕動（ぜんどう）をはじめて、指をきゅるきゅると絞った。自身の肉体の轟きが、フレアを快楽の沼へとスブスブと引きずりこんでいく。
「やうっ！　だ、だめっ！　はあああ……」
当然、史郎の声もすべてマイクに入り、世界中で聞かれている。童貞青年がフレアの動きに身をまかせるだけでなく、果敢に動きはじめた。人差し指を奥まで進ませ、四本の揃った指を開いた肉襞に押しつける。ニチャリと音が鳴り、右手全体があふれる女蜜に満らされた。
「ひゃいいっ！」
膣の奥で、指の第一関節がクイッと曲げられた。女肉の奥を引っかかれて、甘い感覚が間欠泉のように高々と噴き上がる。
「あひいいっ！　おっおおおお、あううううっ！」
二度、三度と連続して奥をクチュクチュと掻かれて、フレアは両脚をバタつかせ、両手の指でマットレスをかきむしる。無意識に強靭な指先で布を引き裂き、中の詰め物をはみ出させた。
「フレアのクリトリスも触るよ」
弾む声がして、史郎の左手の親指と人差し指で、硬くふくれあがった女の肉芽をつまれた。勃起しているとはいえほんの小さな肉の粒から、激烈な電撃が発生して、バリバリと膣へ伝わっていく。人差し指を包む女肉の壁がもっと強く収縮して、フレアは体内の男の存在をより大きく感じてしまう。
「ああっ、そ、そこは！　やあっ、うん、んあああ！」
「フレアのここ、本当にとっても硬くなってるよ！」
陰核をコリコリと強くしごかれると、身体が重力を無視して、勝手にふわりと浮き上がった。尻がマットレスの上五センチの位置に来る。
「それっ、もっ、もう、はっひいいいいっ！」
膣の奥で、より過激に史郎の人差し指が暴れだす。空中に浮いたまま首をのけぞらせ、背中がそりかえり、喉がピクピクと上下する恥態を、フレアはカメラに見せつけた。悦楽の炎に焙られる熱い呼吸に合わせて、剥き出しの乳房が揺りつづける。
「ダメえええっ、もう」
イクッ！　と叫ぶ前に、クリトリスを離され、膣から指を抜かれた。絶頂寸前で放り出されたフレアは、声にこそ出さなかったが、反射的に胸の内で疑問の声をあげてしまう。
（どうして⁉）
そう思ったことが、たまらなく情けなく、恥ずかしい。たまらなく恥ずかしいのに、おあずけを喰らった肉体がとどめの一撃を求めて疼き狂う。
（お、おかしくなる！　このまま放っておかれたら、どうなるか、わからない！）
幸いにも、求めるものはすぐに与えられた。史郎が右手で肉幹をつかみ、亀頭の狙いを定めて、開いた肉花の中心へ迫ってくる。このとき、フレアはまだマットレスから浮いていた。自分が空中にいることを自覚すらしていない。史郎も気にしていない。
「フレア、ぼくのはじめてを受けて！」
膣口に史郎の亀頭の先端が触れ、一気に肉幹の付け根まで押しこまれた。蜜液があふれ出て、フレアの腹に史郎の腹が激突する。
「ああっ！」
「おおっ！」
なんの支えもなしに空中に浮いていながら、一人前の男の渾身のぶちかましを受けても、フレアの身体はまったく移動しない。
「あああああああ――――ああっっ！」
今日はじめて男のシンボルを受け入れた瞬間に、フレアは意識しないまま両腕を史郎の裸の背中にまわし、両脚を史郎の腰にからみつかせた。
二人はいわゆる対面座位の体位になった。
空中で。
フレアはマットレスの上空五センチの位置で、性器でつながったまま史郎を抱いている。対面座位は、座った男の上に、女が向かい合わせでまたがる体位。フレアの下に史郎がいるのだから、飛行能力のない史郎の身体がずり落ちるはずだ。
だがフレアに裸身を密着させ、性器を結合させている史郎が同じように浮いている。まるでフレアの身体から未知の何かが放出されて、史郎を支えているようだ。フレア本人が知らない飛行能力の新たな一面が発露した。

そして、フレアは中断されていた絶頂を極めた。

「イクッ!!」

フレアと史郎の身体が三メートルあまりの高さまで急浮上した。カメラの列が角度を上げて、上昇する二人を追う。

これまでにも世界の飛行能力を持つオフビートたちが、空中で様々なパフォーマンスを披露してきた。東京で空飛ぶ前衛舞踏家がかなりきわどいセクシーなダンスを堂々と公開して、芸術か、猥褻か、と物議をかもし、裁判になったこともあった。

しかし空中で男女が本当に交わり、女性器の中に男性器が深々と埋まる光景を、生中継で世界へ配信するなど前代未聞だ。

自分が人類史上において前人未到の境地に到達したことを、フレアは微塵も認識していなかった。ただ男根から与えられる官能の頂点に、文字通り心身ともに浮き上がって、ゆらゆらとたゆたうばかりだ。

だが史郎が満足していない。生まれてはじめて女の膣内に挿入した青年の欲望が、たかが三メートルあまりの高さに浮かんでいるくらいで萎えはしなかった。両手でフレアのコスチュームのウエストをつかみ、力まかせに下から腰を突き上げる。

フレアの中でペニスが斜め上に向かって力強く弾み、まだ醒めていないエクスタシーの海に、海底火山の爆発のごとく新たな高熱の大波が盛り上がった。

「ひゃううう！　ま、待って！　わたし、まだイッてるのに、あおおおう！」

フレアの言葉はいともあっさりと無視された。史郎がますます猛々しく腰を突き上げてきて、熱い亀頭で女肉のより深い所をえぐられる。一回えぐられる毎に、絶頂を超える別次元の悦びが炸裂して翻弄された。

「あきいっ！　ひゃめ、ひゃいい！　はくううう！」

よがり声をあげながら、フレアの身体がグルンと反転する。三メートルの高さで、フレアと史郎は頭を下にし、肉の交わりを続行していく。史郎が腰を突き下げ、フレアは女の内臓を撃ち下げられる。

「あううっ！　おんっ！　やはああ！」

フレアが嬌声をあげるたびに、二人の身体の向きが変わっていく。歓喜の汗が複雑な軌道を描いて四方八方へ飛び散り、地上で見上げる男たちやカメラに降りかかった。マシンマニアックも自分が演じているアニメの主人公風キャラクターを忘れて、唖然とした顔でクレートダイナミックベースの上から空中回転する男女の全裸と半裸を見上げている。

不思議で、異常で、妖しく、艶めかしい光景が、全世界に流されつづけた。

そして史郎の叫びが、世界中の人々の鼓膜を揺るがせる。

「出すよ！　フレアの中に出すうっ!!」

フレアは耳もとで青年の叫びを聞いたときには、もう体内に灼熱の奔流を感じていた。膣内だけでなく、全身の血管に精液が流れこんで、すべての細胞に染みこんでいく思いがする。

「イッ」

喉がつまった。

「……」

釣り上げられた魚のように口をパクパクさせて、浮力を失ってマットレスに落下する。フレアが背中を下にして、抱いた史郎を衝撃から守ったのはスーパーヒーローの本能だろうか。

喉からヒューヒューと笛のような風い音が出て、やがて小さな囁きとなった。今もマットレスの上でつながったまま横たわる史郎の耳に、そっと唇をつけて、マイクに拾われないように囁きを耳に流しこむ。

「史郎くん、けがはない？」

史郎が目を見開いた。

「どうしてぼくの名前を!?　ああっ！」

史郎の目がさらに大きくなり、顔を引きつらせて、フレアの身体からあたふたと離れた。女体に深々と埋まっていたペニスが引き抜かれると、勃起の勢いが急速に衰えて、ぶらんと垂れる。下を向いた亀頭から、精液と愛液が混じった滴がポタポタと落ちていく。

「ご、ごめんなさい！」
股間を隠すことも忘れて、汗まみれの全裸で立ちつくして叫んだ。
「ああ、わああああ、自分がやったことを全部覚えてる。ぼくはなんてことをしちゃったんだ！」
フレアは上体を起こして、史郎が苦悩する姿を見つめる。
（史郎くんがテレパシーの支配から逃れてる！　わたしが名前を呼んだことが効いたの？）
フレアの胸に希望が灯った。その小さい火を押しつぶすように、背中に冷たい衝撃がたたきつけられた。グレートダイナミックベースから大きな鉄の腕が伸びて、五本の指で背後から胴体を握られる。
フレアは反射的に鋼の巨腕をふりほどこうとするが、マシンマニアックの声がぶつけられた。
「たったひとりがテレパシーから醒めたからといって、勝ったつもりでいるんじゃない。われわれの鉄壁の力は揺るがないぞ。見ろ！」
まるっきりロボットアニメの主人公が、いい気になった悪役に言う口調だ。ベースからもう一本の少しサイズの小さい腕が伸びて、フレアの後頭部をつかみ、前を向かせた。
そんなことをしなくても、フレアは史郎を凝視している。
一度は正気にもどったと見えた史郎の目が、また不自然に曇っていく。息が荒くなり、罪悪感で小さく縮こまっていた肉棒が、凶暴な勃起の力を取りもどしていく。
テスタメントの勝ち誇った声が響いた。
「フレアがなにをしたのかは知らないが、私のテレパシーから簡単には逃れられない」
どうしようもなく、フレアは機械の腕に身をまかせた。背後から胴体を握る巨腕に持ち上げられて、マットレスに立たされる。
グレートダイナミックベースのてっぺんから上半身だけを突き出していたマシンマニアックが、半身浴の浴槽から出るように金属の中から立ち上がった。
「とうっ！」
と、大きな声をあげて、自らが建造した基地からジャンプする。
赤と青と白をかっこよく配色したヘルメットとパイロットスーツが空中で一回転して、地面に体操選手しみたポーズを決めて着地した。滴じるキャラクターに合わせて身体を鍛えているらしく、全身のボディラインがくっきりと出るパイロットスーツには、しなやかな筋肉が表れていた。
パイロットスーツの右の手首からは、金属のロープが伸びて、グレートダイナミックベースに接続されている。マシンマニアックは身体が直接機械に触れていないと操れないので、そのために必要なのだろうが、これではどちらがロボットなのかわからない。
「フレア君の最後に残った穴は、ぼくがいただこう！」
右手をパイロットスーツの首に持っていくと、ファスナーをサッと下げた。スーツの中央部が股間まで縦に割れて、日焼けした素肌が現れた。
厚い胸板ときれいに割れた腹筋の下から、体格にふさわしい雄渾な男根がそびえ勃っている。ゴツゴツした亀頭も、太い静脈が浮き出る肉幹も、肌よりもさらに黒みが濃い。フレアの前に集まる男たちのデニムパンツやチノパン、スラックスやトレパンから林立する肉棒の群れと比べても、トップクラスのサイズを誇った。
マシンマニアックはほとんど裸の胴体とたくましい逸物を力メラに見せつけながら、ヘルメットを取らない。両腕と両脚と頭は隠したままたぎるペニスを振りたてているという、異様で変態的ないでたちだ。
大小二つのロボットの腕に捕まれたフレアの背後に、マシンマニアックが黒い巨根を見せびらかして迫った。
フレアの左右の膝裏を、後ろから伸びたマシンマニアックの人間の手で握られる。警察とスーパーヒーローたち共有のデータによれば身体能力は常人の範疇だが、充分に剛腕だ。
「なにをする！」
叫ぶフレアの両脚が持ち上げられ、強引に大きく割り広げられる。ロボットの腕で支えられた身体が、空中でM字開脚を強制された。
ミニスカートがずれて、ボディスーツの穴から覗く女性器と肛門が、フレアの前に並ぶ史郎と男たちと力メラの列に差し出される。一度は正気にもどった史郎が、また他の男たちと声をそろえて卑猥な歓声ではやしたてている姿が、フレアの胸に突き刺さった。
（史郎くんをテレパシーから解放できても、ただ苦しめるだけになってしまった）
「いよいよだ。ぼくとフレア君の対決に、決着がつくときが来た。ぼくのグレートブレイブドリルを受けろ！」
獰猛な黒い亀頭が、フレアの股間に近づいてくる。
「おっと。その前に、フレア君、ステージのモニターを見たまえ」
「えっ!?」
ステージのちょっとした映画館サイズのモニターに、不思議なものが映っていた。画面全体が人の肌の色になり、その中心から繊細な襞が放射状に広がっている。可憐な一輪の花を抽象的に描いたようだ。
わずかな疑問の後に、フレアは気づいた。それが自分自身の肛門だと。M字型に大きく広げられた股間の下に力メラが潜りこみ、とんでもないクローズアップ撮影をされている。
「そんな……」
（わたしの肛門が全世界に送られてる……）
そう思うと、羞恥で頭も心臓も爆発しそうだ。だが、この悲惨な映像の本当の意味に気づいて、たまらず叫んでしまった。
「そこは違う！」
「ここでいいのさ。ぼくはグレートブレイブドリルで女の肛門を貫くのが大好きだ！」
モニターの巨大化肛門に、同じく拡大された黒い亀頭が接近してくる。こちらは細部まで鮮明になって、人体とは思えない異質な怪物のようだ。
「ああ、やめろ！　ひいっ！」
黒い肉のモンスターに突かれた途端、フレアの肛門が自らゆるんだ。その恥ずかしい姿が、カメラに撮影されて、フレア自身にも見せつけられる。普通なら排出専門の器官がこんなことになるはずがない。おぞましい媚薬粘液の影響にほかならない。
ゆるんだ括約筋を、亀頭がゆっくりと押し広げていく。背後のマシンマニアックが悠然と白い歯列を見せて笑い、わざとスローモーションのように亀頭を進める。拡大映像で見ると、黒い塊が無理やり肛門に侵入していくようで、今にも繊細な器官がビリビリと引き裂けるかと不安になった。

「あっ、あああああああ……」

映像の凄惨さに反して、亀頭の先端を呑んだフレアの尻の中に、肉の悦びが熟れた果実を搾るようにじゅわっと広がる。苦痛を感じるべき暴虐を、魔の媚薬づけにされた肛門が湧き立つ歓喜で迎え入れた。

「あひ、ふあああ……」

背後から両脚を抱え上げられ、M字開脚を強いられている下半身がうねうねと揺れた。その艶めかしい動きは、男根の侵略から逃れようとしているのではなく、もっと早く奥までえぐって欲しいと誘っていると世界中の人々に見える。

マシンマニアックとつながる口ボットの腕がわずかに下がり、フレアの身体が下へ押される。尻の肉花の中にズブッと亀頭が完全に潜りこんだ。狭い腸壁を力まかせに拡張されて、重い快楽が地震のように響く。

「ひいいっ！　くっおおお、大きひい！　あぐうううっ！」

後につづく肉幹も恐ろしいほどに太く、大写しになるモニターからギシギシと尻肉のきしみが聞こえそうだ。

「おお、さすがフレア君は人気スーパーヒーローだ！　輝くばかりの尻の締めつけだぞ！」

マシンマニアックが笑い混じりの歓声をあげて、スローモーションから一転して腰を猛然と突き上げた。タイミングを合わせて口ボットの腕がガクンと大きく動き、フレアの身体を揺らす。

「あがあああっ！」

尻の中に、黒い肉幹が根もとまで没入した。太い杭を打ちこまれて、身体の中心を貫通したように動けなくなる。硬直した体内を、尻から湧き上がった異常な悦楽が駆けめぐり、途切れ途切れの短い声だけがこぼれた。

「かっ！　くっ！　あ！　ほあ！　こあっ！」

（こ、このまま、射精されたら、お尻でイッてしまう……）

今までのみじめな恥態を世界中にさらしていることを考えれば、今さらアナルセックスでエクスタシーを迎えても、なにも変わらないだろう。肛門で愛を交わす人々も大勢いる。などと合理的な判断をできるわけがない。やはり尻で果てるのは、フレアにとって恐ろしく恥ずかしい。しかしマシンマニアックの行動は予想外だった。

（えっ、どうして⁉）

勃起ペニスをすべて挿入すると、マシンマニアックが動かなくなった。牡肉の大剣の鞘にされているような状態でも、尻の中から甘い痺れが全身に広がる。媚薬に冒された女体は、すぐにもっと刺激が欲しい、と訴える。もっと強く、苛烈に尻を責めて欲しい、とむせび泣く。

（わたしが懇願するのを待ってる？　わたしを辱め、貶めるために……）

だが現実はもっと恐ろしいものだった。テスタメントの声がクライマックスを宣告した。

「これが最後のショーだ。さあ、前に出ろ」

テレパシーの選抜を受けて、男たちの中から顔にバンダナを巻いた青年が進み出た。フレアがこれまで一度も相手をしていないひとりで、バンダナにはラッキーリーグのロゴが並んでいる。

くわえて公式フレアTシャツを着ていた。『高い木の枝から降りられなくなった猫を、空中に浮いて助ける』という、世界で最初に登場したスーパーヒーローであるスーパーオブピートの定番となっているシチュエーションを再現した写真が、この状況にあまりにそぐわない。

自分が笑顔でかわいい猫に手をさしのべている写真の下で、マシンマニアックとは対照的な色白の男根が天を衝いている。

フレアとラッキーリーグの両方のファンであるバンダナ青年の役目が、全世界に告げられた。

「フレアの前後の淫らな穴をふさいでやれ」

「そんな！」

フレアはたまらず脚をばたつかせた。両膝からマシンマニアックの手がすべって、身体がガクンとずり下がった。肉棒がいっそう深く腸の奥へと侵入してきて、愉悦の火花を散らきれないほど散らす。

「あひゅううっ！」

自由になった両脚が自然と跳ね上がり、またMの形を描いた。その中心を目がけて、バンダナ青年が突撃してくる。

「おおおおおおっ！」

獣の遠吠えじみた声をともなって、女体の中心に白いペニスが進撃する。フレアの腹にバンダナ青年の腹がぶつかり、二人の男にきつくサンドイッチにされた。

「あっひいいいいっ！」

体内で薄い粘膜を挟んで、黒い巨根と色白の勃起が肉薄した。バンダナ青年がフレアの両脚に腕をからませて腰を突き上げると、薄膜越しに二つの亀頭と肉幹がグリグリとこすれ合う。マシンマニアックもたくましい腰をうねらせて、バンダナ青年の動きを迎え撃った。

二人の男に肛門と膣を同時に責めたてられて、日本でも有数の身体能力を持つ女性スーパーヒーローが、竜巻に翻弄される木の葉のように揺さぶられた。身体の中にバラバラに動く二本の鉄柱を突き立てられ、ふりまわされている。

「おひっ！　ひいいい！　これっ、これはあっ！　だめえっ、くあああああっ！」

史郎と交わったときの不思議な優しさめいたものは、マシンマニアックが加わったために完全に消滅した。このオフピート犯罪者たちはテレパシーに踊らされているのではなく、自分の意志で陵辱しているとわかる。あらためてマシンマニアックとデスタメントへの憎悪が大きく湧き上がった。

しかし怒りも嫌悪も、膣を貫き、懸命に腰を躍らせるバンダナ青年が精液をほとばしらせるまでだった。爆発的にあふれる絶頂の悦びに、スーパーヒーローらしい感情はかき消されてしまう。

「イクッ！　イッちゃうっ！　こんなことで、あああおおう！　イカされるううう――――っッ‼」

思いっきり射精したバンダナ青年が、プログラム通りに動く人形みたいに後退した。濡れたペニスを引き抜き、無言で男たちの群れの中にもどる。

交代にクリーム色のエプロンをつけた青年が出てきた。イベントに出店を許可されたホットドッグ屋台の店員だ。ケチャップの染みがあるエプロンの裾の真ん中が、勃ち上がった生のソーセージにひっかかって膨になっている。

ホットドッグ屋もすぐさまフレアの両脚をしっかりとつかんで持ち上げ、新鮮な生ソーセージで女の花を蹂躙した。

「はおおう！　またイッちゃうううッッ‼」

すぐに白いケチャップが、フレアの膣肉にたっぷりとトッピングされた。

そして、次の制服のイベント警備員も、次の次のザ・セイヴのスタッフも、さらに次のラッキーリーグファンも、マシンマニアックとともにフレアを貫いては、早々と射精していった。

「イクッ！　またイックう！　あああ、もっとイクふうう!!」

膣内に精液を撃ち出されるたびに、フレアの性感は跳ね上がり、より高みへと飛翔させられる。絶頂のうえに絶頂が次々と積み重なり、自分がどこまで昇っていくのか想像もつかない。

「イクんんんん！　あひゅうう、イックッ！　イクイクイクイク！　イッちゃふおおおおううううッッ!!」

エクスタシーを叫びつづけて、普通の人間ならとっくに声が嗄れてしまうところだが、フレアの強靭な声帯は今も澄んだ音色を保っている。しかし意識は沸騰して、まともに考えることもできない。自分の体内に何人分の精液が蓄積されているのか、数えることも不可能だ。

膝腰（ちょうよう）とするフレアの耳に、ふいにテスタメントの声が響いた。今までの尊大な声音にはなかった苛立（いらだ）ちの色が混じっている。

「マシンマニアック、潮時だ。警察とヒーローたちが強行突入の準備をしている情報が入った。プライベートで成田に到着したばかりのイギリス最強のテレパスヒーロー『灰色の脳細胞（グレイセルズ）』が協力を申し出たのだ」

「しかたがない。もっとフレア君の尻を楽しんで、泣かせたかったが、最後にぼくの必殺技を喰らえ！　グレートドリルハリケーン!!」

背後からのマシンマニアックの馬鹿でかい決め声とともに、フレアは身体をひときわ高く跳ね上げられた。マシンマニアックの腰が最大の勢いで突き上がり、武骨な亀頭がミサイルのように尻の奥まで侵略する。

「はひいっ！　お尻ッ！　お尻がああああおあっ、おっあああああっ！」

尻の奥、いや、腸の中で精液が大爆発した。精液が猛烈な勢いで腸をさかのぼり、尻から腹まで充満して、胃を浸される錯覚に陥ってしまう。

「イ」

その先は声にならなかった。絶頂とともに、胃どころか、脳までどっぷりと精液に沈められたように意識が真っ白に溺れる。しばらくの無言の後に、喉からかすれた音がこぼれ出た。

「……ッ……ッ……ク……ウウ……」

全身が硬直して、大開脚の彫像と化したフレアの肛門がまくれ上がった。敏感な粘膜をこすりたてて、黒い肉棒がズルズルと引き出される。さらにひときわ大きく肛門が広がり、ズリュッ！　と、音を立てて握り拳のような亀頭が抜けた。

ブシャッ！　痺れて開ききった尻穴から大量の白濁液があふれて、左右の内腿をだらだらと伝い流れた。腸と共鳴して、膣口からも何人分もが混ざり合った精液が滴り落ちる。

フレアは意識がドロドロに混濁し、大勢の男たちの体液で汚された半裸身も脱力して、ロボットの巨腕に胴体をつかまれたまま前後の肉孔から精液を垂れ流しつづけた。

女性スーパーヒーローの無力でぶざまな姿を、マシンマニアックがながめて、うんうんと満足げにうなずく。

「はははははは！　フレア君の完膚なき見事な敗北だ！　ぼくの絶対勝利だっ！」

マシンマニアックが表彰台のメダリストみたいに右手を高く振り上げた。

右手と金属ロープでつながるグレートダイナミックベースの上部から、二本の太い鉄棒を十字架の形に組み合わせたものが出現した。

巨腕が動き、フレアの身体が背中から十字架に押しつけられる。鉄棒の裏側から何本もの金属触手が伸びて、フレアの手足と胴体に巻きつく。

ロボットの腕が離れると、フレアは鋼鉄の十字架に磔（はりつけ）にされた姿で残された。

十字架にかけられたフレアの周囲に集まる男たちが、訓練したマスゲームじみた動きで左右に分かれた。開いた群衆の壁の向こうで、ひょろりと痩せた人影がステージの陰から出て、歩いてくる。

今までステージのモニターにだけ現れていた銀色の泣き顔の仮面をつけたテスタメントが、悠々とした足取りで礫のフレアの前に立った。

「テスタメントに従い、フレアに死を送るときが来た。フレアが死ねば、人々をテレパシーから解放して、安全に公園から出そう」

テスタメントの言葉が、フレアを白く染まった別世界から引きもどした。

「……ほ、本当に……みんなを、解放してくれるのか」

「テスタメントに載っているのはオフビートの犯罪者とスーパーヒーローだけだ」

（でも、どうやってわたしを殺すつもり？）

人が携行できる兵器で、自分の肉体を破壊できるとは思えない。もしテレパシーで自殺を命じられたとしても、この場で自分を殺す方法が思いつかない。見たところ、テスタメントの武器らしいものは、スーツの懐の左側がふくらんでいるところだけだ。予想通りにテスタメントはスーツの懐に右手を差し入れ、拳銃を出した。普通のオートマチック銃。怪しげな改造の痕跡はない。

「心配はない。フレアのような頑強な肉体を持つオフビートを射殺するために開発した特別な銃弾を、装填してある」

「誰がそんなものを⁉」

テスタメントは答えず、無言で拳銃を構えた。哀しみを浮かべた銀色の仮面が、正面からフレアの顔をにらむ。仮面に穿たれた黒いミラーシェードの目からは瞳の動きを読み取れないが、はっきりと視線を感じる。銃口が眉間を狙った。

（本当に、わたしの身体を破壊できる銃弾なのか。ここで死ぬのか……）

スーパーヒーローになったからには、いつかは犯罪者との闘いで命を失うことがある、とフレアは以前から考えてはいた。偉大な最初のスーパーヒーローのスーパーオフビートも、地球の全生物の根絶を目的とする異星のロボット『生ける最終戦争（リビングラルマゲドン）』と闘い、地球を救って南極で落命した。

（ついに、そのときが来た）

せめてまっすぐに前を向いて死にたい。そう思い、じっとテスタメントの仮面をにらみ返す。

ふいにテスタメントの右手が動き、銃口が右へずれた。鋼鉄の十字架の手前に立つマシンマニアックの顔へ向けられる。

銃声が轟く。

そのときにはフレアの手が拳銃をつかみ、銃口をそらしていた。目の前で自分以外の人間が死ぬとわかった途端、頭にのこっていた霧が晴れて、全身を縛る金属触手を引きちぎり、テスタメントに跳びかかっていた。発射された弾丸は、マシンマニアックの引きつった顔のわずかに斜め上を飛んでいった。

フレアはテスタメントの右手をつかんだまま叫ぶ。

「なにをする！　おまえの仲間だろう！」

「オフビート犯罪者はすべてテスタメントに載っている」

テスタメントの左腕の袖の中からもう一丁の小型の拳銃が滑り出て、一瞬で左手に納まった。

「テスタメントに従いフレアに死を送る！」

新たな銃口がフレアの鳩尾（みぞおち）に押しつけられる。

次の瞬間、テスタメントの左腕の肘が曲がった。銃口がフレアの鳩尾から離れて、自身の腹に向けられる。銃声が連続して、テスタメントのダークグレイのスーツにいくつもの穴が開き、赤い染みがパッと広がった。

「ガッ！」

テスタメントがごく短いうめき声を発すると同時に、公園中からいっせいに同じうめき声があがった。

自分の腹を撃ったテスタメントと、フレアの目に映るすべての人々、周囲を包囲する男たちも、ステージのラッキーリークも、ステージまわりにいる女たちも、同じタイミングでその場に昏倒する。

「そんな！」

フレアは近くの男たちに駆け寄ると、次々と鼻や首に手を当てた。呼吸も脈も正常だ。見たところ、全員がすやすやと熟睡しているようだ。

「いったいなにが起きてるんだ？　うっ！」

突如、頭の中に強烈な閃光と爆音が轟いた。脳内で打ち上げ花火が開いたようだ。

「テレパシー⁉」

以前に共闘したヒーロー『ミスター頭突き（ヘッドバット）』の強烈な緊急連絡テレパシーを受けたときと似た感覚だ。鮮やかな衝撃がほぐれると、言語や映像や五感がないまぜになって複雑にもつれたものが意識の中に展開する。死の真際に見るという人生の走馬灯さながらのスピードで、現実の時間では数秒のうちにフレアはすべてを理解させられた。

最初にテレパシーは、見知らぬ憔悴した男の姿となった。いかにも憎々しい木偶な顔つきでニヤリと笑って告げる。

「安心しろ。自分の腹を撃ち抜いたショックで、人質はすべて解放された。このテレパシーはフレアだけに送ったものだ。ギリギリでテスタメントの支配から逃れてやったぞ。ひゃははは、ざまあみやがれ。俺たちテレパスの脳は特別製だ。そこらのオフビートとはものが違うんだぜ。ははは」

言葉だけでなく、男の体験が脳の中でくりひろげられる。

男は『放（ブロードキャスト）送局』と名乗る小悪党だった。脳内に現れた名前を聞いても、素顔を見ても、フレアは全然記憶になかった。静子が集めた犯罪者データを読めば、C級リストの端っこに載っているかもしれない。

他人の思考を読むことができない送信専門のテレパスだが、一度に大勢に送れるのでブロードキャスターと名乗っている。能力をフルに使えば、今日のように大規模な事件を起こすことも可能だが、ブロードキャスターはいろいろな詐欺グループの一員で満足してきた。プロの犯罪者だが、暴力をふるうことを嫌う小心者なのだ。

そして数日前に、テスタメントに支配された。

仕事を依頼すると呼び出されて、言葉巧みに誘導されて、銀の仮面をかぶってしまったのだ。仮面の中には人間の脳を支配する装置があり、顔に着けている間は完全な操り人形にされる。

頭の中のブロードキャスターが苦悩の表情で、フレアの意識に告げた。

「くそったれな仮面から、テスタメントの意志が入ってきやがる。俺はテスタメントの正体を知った。いいか。テスタメントは人の名前でも、組織の名前でもないぞ。

テスタメントはプログラムだ！

佐々木伸郎博士が遺したコンピューターのプログラムこそがテスタメントなんだ！」

「馬鹿な！　佐々木博士はザ・セイヴ基金の創設者だ。善意の人だ」
フレアは自分の意識の中の他人になったが、脳内のブロードキャスターは記録映像のように表情を変えずに語りつづけた。
「俺が見せられたテスタメントの意志を、フレアに見せてやる」
脳内に別の男の姿が現れた。鳥の巣状のもじゃもじゃの黒髪と、分厚いレンズの眼鏡。フレアがザ・セイヴの記録映像で見た佐々木博士が、自分の研究室でこちらへ向かって語りかけてくる。いや、カメラに向かって語りかけている。これは機械が録画した映像だ。カメラの前で佐々木博士は憑かれたように、同じことを何度も何度もくどくどとしゃべりつづけた。その間に、佐々木博士は恐ろしいスピードでやつれて、肉を削ぎ落とされているように痩せ細っていく。博士が病気で亡くなるまでを凝縮した映像なのだろう。
佐々木博士は幼い子供へ聞かせる寝物語のようにしゃべりつづける。
博士は自分が病気で長くない命だと知っていた。だが息子の繁が自分に優る科学の才能を持ち、自分の研究を受け継いでくれるとわかって、安心して死ぬつもりだった。しかし繁は偶然、オフビート犯罪者とスーパーヒーローの闘いに巻きこまれて、佐々木博士よりも先に死んでしまった。
そうして佐々木博士は壊れた、とフレアには見えた。
犯罪被害者の遺児を支援する慈善の団体を設立するのと同じ熱意で、復讐の業火を燃え上がらせた。残りの命を、自分に代わってオフビート犯罪者とヒーローに復讐するプログラムの開発に費やした。
すなわち佐々木博士が語りかけつづけている相手。
それこそがテスタメント。
まさに佐々木博士の遺言。
佐々木博士が死んでから、テスタメントは十年かけて自分を進化させ、ついに復讐の実行を開始した。意志のあるコンピューターウイルスとしてネットを自由に動きまわり、いろんな機械を動かして情報や物資を集め、必要なものを作った。そして哀しみの仮面でオフビート犯罪者たちを操り、復讐を実行する人形にした。
「わかるか。テスタメントは今やネットのどこにでもいる。日本中、いや、世界中にいて、オフビートを狙いつづけるんだ」
恐るべき警告の言葉を最後に、脳内を占有していたブロードキャスターの記憶がふいっと消え失せた。
そのかわり、新たな言葉がテレパシーで送られてきた。
「……くそったれな仮面を、はずしてくれ……」
フレアは血まみれのテスタメントのかたわらに膝をつき、仮面に両手をかけた。仮面から脳へなにかの装置が挿入されていないかと危惧したが、あっさりとはずれた。
現れたのは有能な商社マンという雰囲気の、誠実そうで好感が持てる顔。テレパシーでフレアの脳内に現れた、いかにも悪ぶった態度とは雰囲気が正反対だ。あれはブロードキャスターが持つ犯罪者としての自己イメージで、実際のブロの詐欺師とはこういう外見がふさわしいのかもしれない。
見下ろすフレアへ向かって、血の気が失せた顔の唇がわずかに上がった。声は出なかったが、またテレパシーが来た。
「……俺はケチな小悪党だが、ガキのころから自分の好きなように犯罪をやってきたんだ……他人が作ったプログラムなんかに操られて、スーパーヒーローを殺すなんて、プライドが許さねえ……」
「もういい。今から病院へ連れていく。おまえを死なせはしない」
ふいにフレアの背中とブロードキャスターの顔、地面に転がるテスタメントの仮面に影が落ちた。中継されている映像を見て、警察かマスコミのヘリコプターが来たのだろうか。それともスーパーヒーローか。サンダークラップスのチームメイトか。
だがフレアの耳は、影とともに複雑な機械音を聞いた。通常のヘリコプターでも飛行機でもない。顔を上げると同時に、地面を蹴って空へ飛翔する。
青空には三体の人間型のロボットがいた。
三体は同じ形状で、光沢のない黒い身体は三メートルほど。マシンマニアックが造る子供向けアニメの主役ロボットじみたものではなく、それよりもサイズは小さいが、あきらかに実戦用に作られた威圧的な人間兵器だ。
ただし三体とも頭部の前面には、戦闘には不必要な顔がある。テスタメントのシンボルの哀しみを表現した銀色の顔。ブロードキャスターの言葉が正しく、テスタメントが機械の中に入りこむプログラムならば、あの三体のロボットもテスタメントそのものだ。
三つの哀しみの仮面から、きれいにシンクロした声が響いた。
「テスタメントに従いフレアに死を送る」
「テスタメントに従いブロードキャスターに死を送る」
「テスタメントに従いマシンマニアックに死を送る」
三体の声を圧して、フレアは咆哮を放った。
「誰も死なせない！」
フレアは渾身の拳を、一体目の胴体深くにめりこませた。

エピローグ　三日月の夜

「テスタメントに従い、サンダークラップスに死を送る」

銀色の哀しみの仮面をかぶった男が、パイプオルガンに似た荘厳な音色を響かせる声で宣告した。機械を通してはいるが、もとの声に力があるとわかる。

三日月に照らされる深夜の倉庫街を背にして、ダークグレイのスーツ、そして黒いシャツを着たガッチリした長身が立っている。そのシルエットが一瞬で人間サイズの黒い蝙蝠へと変身して、空へ飛び上がった。

肉体は巨大蝙蝠と化し、衣服が消えてなくなっても、顔には銀仮面をつけたまま、空中を舞って月光をキラキラと反射する仮面の上から、大きな蝙蝠の耳が生えている。

広げた翼の内側に広がる暗闇から、蝙蝠が何匹も飛び出した。動物ドキュメンタリーでよく見る、洞窟から飛び立って何キロメートルもつづく蝙蝠の大群の先端のようだ。

だが蝙蝠たちが大群を成す前に、フレアが上空から隕石さながらに落下してきて、巨大蝙蝠の背中に激突した。

「キキキイイイイイッ！」

なかば超音波の悲鳴を放って、巨大蝙蝠はアスファルトの路面にたたきつけられた。翼で道路をたたいてジタバタする怪物の銀仮面の顔に、フレアは右手に持つ直径五センチほどの白い円盤を押しつけた。

「ギギギガガガエエエエ――ッツ！」

耳障りな悲鳴を夜空に轟かせる巨大蝙蝠の顔から、銀仮面がはずれて、路面に転がった。

フレアのブーツに踏まれる巨大蝙蝠が、一瞬で人間の姿にもどる。素顔は日本人と白人のハーフらしい彫りの深い美形の中年男。笑みを浮かべるだけで何人もの女を虜にできそうだが、フレアは憤怒の声をぶつけた。

「おい、三日月伯爵！　正真正銘の吸血鬼のくせに、コンピュータープログラムなんかに操られているんじゃない！」

カウントクレセントは脱いだ犬歯を剥き出して怒鳴り返した。情けない姿だが、声の響きは、耳に心地よい魅惑の低音だ。

「失敬な！　それが夜の貴族に対する言葉か！」

「こんなことだから、おまえはヴァンパイアの間でも三流あつかいなんだよ。女を騙す犯罪ばかり起こしやがって」

フレアはお目にかかったことはないが、上位のヴァンパイアたちは神のごとき威厳と妖力を備えて闇の世界に君臨しながら、人間社会と平和に共存しているという。

「忌まわしい機械の仮面から解放してくれたことを、今は感謝してやろう」

ヴァンパイアの身体が白い霧に変貌し、フレアの脚の下から離れた。すばやく路面を這う霧の中から、人の姿のときと変わらない低音の魅力が聞こえてくる。

「私自身の魔力でおまえを下僕にしてくれるわ。そのうちにな。うひゃあああ！」

声のトーンが、落とし穴に落ちたリアクション芸人さながらに跳ね上がった。霧の真ん中に、いきなり大きな植物が出現した。緑の葉が壷の形になっていて、その中に悲鳴をあげる霧が吸いこまれていく。

緑の大壷の側面に、人の形のシルエットが映って手足をジタバタと暴れさせている。

「なんだ、これは⁉　つまらん魔法だ！　出せ！　出しやがれ！」

植物の陰から、ひょいとジャガーに似た獣人の姿のオセロットが顔を出した。

「それは南アメリカ大陸のギアナ高地にだけに生えている食虫植物ヘリアンフォラの精霊さ。たまには蝙蝠の餌の虫の気分を味わってみなよ」

ヴァンパイアのわめき声が徐々に小さくなるなかで、道路に面して並ぶ大きな倉庫のひとつから、私服の刑事と制服の警察官がぞろぞろと出てきた。その中に真紅に青い稲妻が走るボディスーツを着たスターサンダーと、エメラルドグリーンの装甲スーツをまとうローズデバイスもいる。

ローズデバイスは沈んだ声を、フレアとオセロットへ告げた。

「倉庫の中の機械とロボットはすべて、テスタメントプログラムバージョン4に感染していました。幸い、すべて新開発のワクチンで消去できます」

テスタメントの存在が知られてから、すぐさまワクチンプログラムが開発されて世界中に配布された。大部分のテスタメントプログラムは消滅したが、一部が様々なバージョンに自己進化して、増殖と活動をつづけている。カウントクレセントもその犠牲者のひとりだ。

スターサンダーは路面に転がる銀仮面を拾い上げて、そっとつぶやいた。

「永遠の追いかけっこになるかもしれないわ」

リーダーの真剣な言葉も、フレアの耳には届いていなかった。現場検証する警視庁の面々の中に山田刑事の姿を見つけて、自分から声をかけた。

「山田刑事、史郎くんはお元気ですか」

ブロードキャスターのテレパシーに操られた人々は、『新宿公園の惨劇』と呼ばれるようになった事件の記憶を失っていた、という都合のいい展開はなかった。全員が自分のしたことをはっきりと覚えていて、多くの犠牲者が今も力ウンセリングを受けている。

ブロードキャスターも重傷ながらも生き残り、現在も警察病院で入院治療中だ。マシンマニアックは刑務所で特別な石造りの独房に収監されている。

山田刑事は深々と頭を下げた。

「息子のやったことは本当にすまない」

フレアはせいいっぱいの笑みを浮かべた。自分でも硬くてわざとらしい顔面筋の動きだとわかる。

「すべてはテスタメントの責任です。史郎くんは被害者です。わたしは平気だと伝えてください」

「ありがとう」

また頭を下げる山田刑事の向こうで、二人の制服警官がチラチラと視線をフレアへ向けて、意味ありげな顔になっていた。

（あの二人も、あの映像を見たんだな）

新宿公園の惨劇の後で、スーパーヒーロー活動中に会った人々の一部の雰囲気が微妙に変わった。さすがに面と向かってあのときのことを口に出す者はいないが。

（それでも、わたしはヒーローでありつづける。それが、わたしが存在する理由なのだから）

フレアが胸で炎を燃やしていると、背後から肩をポンポンとたたかれた。ふりかえると、スターサンダーのほがらかな笑顔がある。
「その顔つきだと、宿命とか、運命とか、そういうことを考えているでしょう。ダメダメ。宿命なんかじゃなくて、わたくしたちは自分の意志で、ヒーローをやりたいからやっていることを忘れてはいけないわ」
「わかってるって、リーダー！」
フレアは本物の笑みを浮かべた。

*

この翌日、フレアは性の解放と進化を謳う前衛芸術パフォーマンス集団『空飛ぶ肉体（フライングフレッシュ）』から参加を要請された。
もちろん、丁重に断った。顔を引きつらせて。

Illustration by 緑木邑